536
338

224

ヴィルヘルム・ディルタイ著
三枝博音譯

精神科學序說

人文書房版

536
338イ
595-189

譯者序

この書はヴィルヘルム・ディルタイ(Wilhelm Dilthey)の,,Einleitung in die Geisteswissenschaften"の第一卷第一編を飜譯せるものである。これに「精神科學序說」といふ稱呼を冠せしめたのは、この第一編は序說する第一編(erstes einleitendes Buch)とディルタイによつて呼ばれてゐるからである。ディルタイによつて企圖せられた「精神科學序說」は二卷五編より成るべきものであつた。しかし今日遺されてゐるものは第一卷兩編のみであつて他は遂に完成されなかつた。企てられた「精神科學序說」の全體の結構はディルタイの序文の中に記されてゐるから、ここには語らない。ただ第一卷兩編の關係について少しく述べて置きたい。

私をしてこの書の飜譯に向はしめたものは、「精神科學序說」は、殊にこの第一編は眞に理論を追ひ眞理を探ね求める者への高き意味に於ての手引である、と私自身深く感じたことである。さてそれは如何なる意味に於て手引であるといふのであらうか。――許され得る限り可及的に眞に具體的なるものを、眞に實在性と言はるべきものを把へようと努力する者の前にも、先づ、生命(レーベン)若くは實在(ヴィルクリッヒカイト)といふ言葉でもつて言ひ表はされるものが、投げ出されざるを得ないであらう。そして已にこの生命若くは實在は思想的色合を有つて現はれてゐることは拒まれないであらう。がしかし、この一事よりして、この生命若くは實在は豐なる內容を蓄へたえず生長し發展せる・人間の思量をはるかに越えたものではあるが、この實在を領解しようといふ希望が人間に許され得るものとなる。この大いなる生命の前に立つて一生焦慮せるひとりの哲學者を私はディルタイの中に見出すのである。彼にとつて時にはこれを概念的に把握することは

勿論表象的に描き見ることすらも絕望的に思へたであらう。ディルタイはこの生命若くは實在をかう構想してみた、地上に繁茂せる一つの樹木として。ディルタイにとつては、人類の中に豐かに簇生せる諸の思想や科學を歷史的に辿ることは、かの實在に親しむことである、がそれと共に、思想や科學そのものの根元(ねもと)を深くさぐり尙仔細にその培養土を廣くたづねてみることも、かの實在に近づくことである。一は一つの樹木の生長を太陽の明るい光の中に示すこと、他はその同じ樹木の地下にある根を探り求めることであると言へないであらうか。ディルタイは、前者は歷史的自省(ゼルブストベヴンヌンク)、後者は認識論的自省であると、言つてゐる。概括的に言ふならば、第二編は歷史的自省のために捧げられ、第一編は認識論的自省のために換言すれば歷史的涉獵の眞の理解を持たしめ進んではかの生命の領解を容易ならしめることのために捧げられてゐる。それ故にディルタイはかう言ふ、「序說する第一編は何よりも先づこの私の研究の對象(オッベット)を

概瞥させる、すなはち、歴史的—社會的實在を、それに於てこの實在が人類の自然的節成（グリーデルンク）の内にあつて諸の個別的統一態から組み立てられてゐるところの聯關に於て、ならびにこの實在についての諸科學即ち精神諸科學を、それに於てこれらの諸科學が認識作用（エルケンネン）の・この實在の奪取から生れ出たところの撰り分け（ゾンデルンク）及び内的諸關係に於て概瞥させる。そしてそれはこの精神科學序説に這入つてゆく者がその對象（オッベクト）そのものをそれの實在性に於て領得し得んがために外ならない。」尚「精神科學序説」一卷の根柢には次の如き思想が流れてゐる、凡そ哲學とは、何よりも先づ、實在性（レアーテート）、實在（ヴィルクリッヒカイト）を純粹なる經驗に於て把へそして認識批判が規定するところの限界を守つてこれを分析することへのある導（アンライトウンク）きである、といふ根本思想である。この思想は殊に第一編に於て遺憾なく示されてゐる。さすれば、この第一編はディルタイの精神科學論への序説でもあるが、歪められざる傷められざる實在を把へようために正しき理論を求める者へのよ

き手引であると言ふは、極めて至當のことであらう。ディルタイ自身も、この書は一つの機關（オルガン）である、と言つてゐる。

ディルタイの「精神科學序説」が現代の思索者に對して寄與するものの中、私は何よりも次の二つの點をここに擧げて置きたい。その一つは、Wirklichkeit（如實の世界）を撓めず歪めず理解しようといふ現代人にとつての最も強い學的關心に對して、「精神科學序説」に含まれたるディルタイ思想が投げかける光である。かかる理解は決して容易なものではないであらう。「あらゆる思慮ある歴史家、法律家、政治家の心魂（しんこん）を煩したであらう諸問題が、私の勞作するに當つて私を惱ませた」とは、ディルタイがこの書の序文に於て述べてゐる述懐である。それだけにこの至難の業に進む者に對して與へる光は大ではないであらうか。もう一つは、諸の精神科學は勿論諸多の自然科學の認識の收果を取り入れて、實在の領解に資せしめようとするディルタイの企圖である。或はこのこと

はディルタイにあつてただ企てられたに過ぎぬかも知れない。しかし、ディルタイ思想の中のある重要なる方向はそこにあると私には思はれる。

次に、この飜譯の仕事に關して少しく述べて置きたい。

一、この飜譯にはディルタイ全集（Wilhelm Diltheys Gesammelte Schriften）の第一卷を用ひた。私としては、何よりも原文に忠實といふことに努めた。そのために日本文として晦澁なる點は、譯者の力足らざるためであつて、深く恥づるところである。尚それに增して譯者の憂慮するところは、原文中の言葉に纏へる意味を傳へたいために圖らざる誤解を犯してゐることであらうことと、元來內容上この書の亘るところは極めて多方面であるために、それぞれの方面の知識なくして、意味深き言葉を中性化したことのあるであらうことである。叱正を乞うて止まない點である。

一、この譯書は昭和三年五月大村書店から出版されたものであるが、事情あつて發行所が人文書房に移されたことを附記して置きたい。

昭和五年一月二十日

東京市外吉祥寺にて

三枝博音

目次

譯者序……1
精神科學序說……1
序……三
一　この精神科學序說の意向（Absicht dieser Einleitung in die Geistes-wissenschaften）……三
二　精神諸科學は自然諸科學と並存する一個獨立の全體（Die Geistes-wissenschaften ein selbständiges Ganze, neben den Naturwissenschaften）……一五
三　この全體と自然科學の全體との關繫（Das Verhältnis dieses Ganzen zu dem der Naturwissenschaften）……五一
四　精神諸科學の概觀（Die Übersichten über die Geisteswissenschaften）……六一

五　精神諸科學の材料（Ihr Material）……七九
六　精神諸科學に於ける言ひ表はしの三部類（Drei Klassen von Aussagen in ihnen）……八三
七　歴史的-社會的實在からの特殊諸科學の分離（Aussonderung der Einzelwissenschaften aus der geschichtlich-gesellschaftlichen Wirklichkeit）……八六
八　この實在の要素としての個個の人間の諸科學（Wissenschaften der Einzelmenschen als der Elemente dieser Wirklichkeit）……八九
九　歴史的-社會的實在の聯關に對する認識作用の地位（Stellung des Erkennens zu dem Zusammenhang geschichtlich-gesellschaftlicher Wirklichkeit）……一〇八
十　人類並びに個個の民族の自然的節成の學的研究（Das wissenschaftliche Studium der natürlichen Gliederung der Menschheit sowie der einzelnen Völker）……一一〇
十一　特殊諸科學の更に二つの部類の區分（Unterscheidung von zwei weiteren Klassen von Einzelwissenschaften）……一二六
十二　文化體系の諸科學（Die Wissenschaften von den Systemen der Kultur）……一四
一　文化の諸體系と社會の外的體制との間に存する諸關係。法律（Die Beziehungen zwischen den Systemen der Kultur und der äusseren Organisation der Gesellschaft. Das Recht）……一五一
二　文化の諸體系の認識、倫理の學は文化のある體系のある科學である（Die Erkenntnis der Systeme der Kultur. Sittenlehre ist eine Wissenschaft von einem System der Kultur）……一六八
十三　社會の外的體制の諸科學（Die Wissenschaften der äusseren Organisation der Gesellschaft）……一八五
一　心理學的基礎（Die psychologischen Grundlagen）……一八五
二　歴史的事實としての社會の外的體制（Die äussere Organisation der Gesellschaft als geschichtlicher Tatbestand）……二〇二
三　社會の外的體制の理論的叙述の課題（Die Aufgabe der theoretischen Darstellung der äusseren Organisation der Gesellschaft）……二二六

十四 歴史の哲學及び社會學は何の眞の科學ではなく (Philosophie der Geschichte und Soziologie sind keine wirklichen Wissenschaften)……二四七
十五 歴史の哲學及び社會學の課題は解くことのできぬものである (Ihre Aufgabe ist unlösbar)……二六四
精神諸科學の聯關中に於ける歴史學の課題の規定 (Bestimmung der Aufgabe der Geschichtswissenschaft im Zusammenhang der Geisteswissenschaften)…二六四
十六 歴史の哲學及び社會學の方法は誤つてゐる (Ihre Methoden sind falsch)…二九六
十七 歴史の哲學及び社會學は歴史學の社會の特殊諸科學に對する地位を認識してゐない (Sie erkennen nicht die Stellung der Geschichtswissenschaft zu den Einzelwissenschaften der Gesellschaft)……三一
十八 特殊諸科學のたえず成長するその擴張と完成 (Wachsende Ausdehnung und Vervollkommung der Einzelwissenschaften)……三一〇
十九 精神の特殊諸科學に對するある認識論的根據づけの必然 (Die Notwendigkeit einer erkenntnistheoretischen Grundlegung für die Einzelwissenschaften des Geistes)……三二六

補遺……三四一

補遺……三四三
精神科學序說の聯關 (Zusammenhang der Einleitung in die Geisteswissenschaften)……三四六
社會學 (Soziologie)……三七一

序

茲にそれの前半を公けにするところの書は、ある歴史的遣り方（ein historisches Verfahren）とある體系的遣り方（ein systematisches Verfahren）とを結び合はせて、精神諸科學の哲學的基礎の問題を私に許され得る最も高き確實性でもつて解かうとするものである。歴史的遣り方は、哲學がこれまでに今見るが如きかかる基礎づけをかち獲るに努力して來たその發展の道程を辿る、この遣り方は、特殊諸理論がこの發展の中で占める歴史的位置（ゲシヒトリッヘル・オルト）を規定し、そして歴史的聯關から制約されたそれら理論の價値を見定めることを求める、それのみか、この遣り方は尚進んで、これまでの發展のかかる聯關の中に深く沈潛することによつて、現代の學問的運動（ベヴェーグンク）の極く内的なるその推進力（アントゥリーブ）に對するある判

斷をかち獲ようとする。かくして歴史的提示(die geschichtliche Darstellung)は、この企の他半の對象となるべき認識論的根據づけ(die erkenntnistheoretische Grundlegung)の準備を調へる。

歴史的及び體系的叙述はかやうに相互に補償し合ふべきもの故、私が體系的根本思想の概要を示すならば、それはよく歴史的部分(ゲシヒトリッヘル・タイル)の渉獵(レクトユーレ)を容易にする。

中世の終結に當つて特殊諸科學の解放(エマンチパチオーン)が始まつた。然るにそれらの中で社會及び歴史の科學は依然としてなほ長く、前世期のずつと後に至るまで、形而上學への古き隷屬の内に殘存した。加之、自然認識の漸次增大する威力は、この二つの學にとつて以前のそれに劣らず壓迫的なるある新たなる屈從を、强ひることになつた。先づ歴史派(ヒストーリッシエ・シュエ・シューレ)——この語は普通よりずつと包括的な意味にここでは用ひる——が起るに及んで歴史的意識及び歴史學の解放を成し遂げた。この時に、フランスにあつて十七八世紀に於て發展せしめられた社會的

諸理念の體系、即ち自然法、自然宗教、抽象的國家論及び抽象的經濟學(ポリテイッシエ・エコノミー)としてのその體系が、革命に於てそれの實際的結論を引出したとき、またこの革命の軍隊が、あの古い珍稀に建て込んだ、そして千年の歴史の氣息をその四圍に漂はせるドイツ帝國の古い諸の建物(ゲボイデ)を占領してこれを破壞したとき、實にこの時に吾吾の祖國に於ては、すべての精神的事實が生起するところの過程としての歴史的生長についてのある直觀が形成され來り、嘗ての社會的諸理念の全體系の眞理ならざることを表明するに至つた。この直觀はヴィンケルマン及びヘルデルから浪漫派を通じニィブール、ヤコブ・グリム、サヴィニイ及びベックに及んだ。それは革命に對する反跳によつて强められた。英國に於てはバークによつて、フランスに於てはギゾー及びドックヴィュによつて弘められた。この直觀はヨーロッパの社會の諸の鬪爭に於て、それは勿論法律、國家、若くは宗教に關したのであるが、到る處十八世紀の諸理念と敵對し衝突した。この

派の中には、ある純粋に經驗的なる考察法が活きてゐた、卽ち歷史的過程の特殊性への愛好的沈潛が、尙また、個個の事實狀態(タートゼシュタント)の價値をひとり發展の聯關からのみ規定しようとする歷史觀察のある普遍的精神が、更にまた、現代の生活に對してその說明と規律とを過去の研究の中に求め、而してそれにとつては畢竟精神生活はあらゆる點に於て歷史的生活であるところの社會理說のある歷史的精神が、生動してゐた。この學派から新たなる諸理念のある流れが無數の運河(カナール)を通じてすべての特殊諸科學に流れ込んで來た。

併し、歷史派は今日まで、生活に及ぼす影響と同樣それの理論的完成を妨げずにはゐなかつた內部の幾つかの障害(シュランケン)を、穿行することができなかつた。この歷史派が試みた研究及び歷史的現象の加工(フェルヴェルトウング)には、意識の事實の分析との聯關が、だから終審(イン・レツテル・インシユタンツ)に照らして確實なる唯一の知識に立つての基礎づけが、約言すれば、ある哲學的根據づけが缺如してゐた。卽ち認識論と心理學への健全な

る關繫(Verhältnis)が缺けてゐた。それ故に歷史派は說明する方法をすら成就するに至らなかつた、而も歷史的直觀(アンシヤウエン)と比較法はそれ自身では精神諸科學とのある獨自なる聯關を建てあげることも、生活に對して影響を與へることもできない。かくして、コント、スチュアート・ミル、バックルが新たに歷史的世界の謎を、自然科學的原理と方法を移植することによつて、解かうと企てるに及んでも、そこに抗辯は企てられたが、それは、一層生氣もあり一層深くもあるが自ら發展することも他を基礎づけることもできないある直觀が、分析には堪能であるが貧困で低級なるある直觀に對して取つた甲斐もない抗辯に終つた。幾多のカーライル及びその他の潑剌たる思想家達の精密科學への反抗は、その口辯(クンゲ)とその言葉遣ひ(シユプラツヘ)の不自由さ(ゲブンデンハイト)と同樣その憎惡の强さに於て、まさにかかる狀態のある徵表であつた。而してかくの如く精神科學の基礎に對して何等の確信をもたぬところから、特殊研究者達は或は單なる記述に隱れ、或は才華を誇る

主觀的解釋に滿足を見出し、或は再び形而上學に寄り縋つて、形而上學がその信賴者に對して實際的生活を改造する力があると約束する空虛な命題に賴らうとした。

精神諸科學のかくの如き狀態を感ずることに資(もとづ)いて、次のやうな試みが私に起つて來た、歷史派の原理とこの派によつて現に徹底的に規定をうけてゐる社會の特殊諸科學の勞作(アルバイト)とを哲學的に基礎づけ、かくしてこの歷史派と抽象的諸理論間の爭ひを調停しようといふこと。それで、恐らくあらゆる思慮ある歷史家、法律家、政治家の心魂を煩はしたであらう諸問題が、私の勞作するにあたつても私を惱ませた。かくて私の中に精神諸科學のある根據づけの必要と企劃とが生長した。一體如何なるものが、齊しく歷史記述家の判斷、經濟學者(ナチオナールエコノーメン)の諸論定、法律家の諸概念の根柢に橫たはり、それらの確實さを規定し得ることを可能ならしめる諸命題の聯關なのであらうか？　この聯關は形而上學にま

で溯るものであるのか？　何か形而上學的諸概念により支へられてゐるある歷史の哲學か或はかかる自然法があるか？　併し、若しそれが否定され得るものとすれば、特殊諸科學に連結と確實性を與へる諸命題のある聯關に對しての確固たる後楯は何處にあるのであらうか？

コント及び實證論者達、スチュアート・ミル及び經驗論者達のこれらの疑問への解答は、歷史的實在を自然科學の諸概念と諸方法とに適應させようために、歷史的實在を揉め傷けるものと私には思へた。それに對して起つた反動、ロッツェの小宇宙(ミクロコスモス)はその獨創的な代表であるが、これは私には、特殊諸科學の正當な獨立性、これらの科學の經驗方法の多產的な實力、根據づけの確實さ、これらをば、永久に失はれたる心情の滿足を科學を通して憧憬的に呼び戻さうと熱望するある感傷的氣分のために、犧牲にするものと思へた。私は專ら內的經驗の中に、意識の事實のなかに、私の思惟に對するある安定した投錨地(アンケルグルント)を見出し

た。そして私は、如何なる讀者もこの點に於ける論證から遠ざかることはないであらう、といふ喜ばしき自信を持つてゐる。すべての學は經驗科學（Erfahrungswissenschaft）である、併しすべての經驗（エルファールンク）は、それの始原的聯關及びこれによりて規定されてゐるそれの妥當を、それの内にあつて經驗が現はれるところの吾吾の意識の諸條件の中に、吾吾の本性の全體の中に、持つてゐるものである。吾吾はこの立場、卽ち意識の諸條件の背後に立ち戻ることの、謂はば眼なくして見る、若くは認識作用（エルケンネン）の視力を眼そのものの後ろへ向けることの不可能を終始正當に洞察する立場を、認識論的立場と呼ぶ。現代の學はこれ以外如何なる立場をも承認するを得ない。さて進んで恁ういふことが解つた、精神諸科學の獨立性はまさにこの立場から、歷史派が要望する如きある基礎づけを見出すといふこと。何故なればこの立場に於てすれば、吾吾（ウンゼル）が全自然（ビルト・デル・ガンツェン・ナトゥール）についてゐるがくところのものは、吾吾に祕められてゐる實在が投げる單なる影に過ぎぬこ

と、これに反して、あるままの實在性は吾吾は内的經驗に於て與へられる意識の事實に緣（ゆ）いてのみ所有することが、分つて來る。この事實の分析は精神諸科學の中心である。かくして精神世界の諸原理の認識は、歷史派の精神のあるところに適つて、かの事實の分析そのものの領域の中にある、而して精神諸科學はそれ自身に於て獨立せる一つの體系を構成する。

私は私がかかる諸點に於てロック、ヒューム、及びカントの認識論派と種種に一致せることを、見出した、だが併し私は、それの内に吾吾が共共に哲學の全柢（ガンツェス・フンダメント）礎のあることを認めるところの意識の事實の聯關を、この學派が取扱ふよりもずつと異つて把へざるを得なかつた。僅かばかりの而も學的完成に達してゐない未成の諸命題、例へばヘルデルやヴィルヘルム・フォン・フンボルトのそれの如きは今これを問はないとするならば、これまでの認識論は、カントのそれと同樣經驗論者のそれも、經驗及び認識を單なる表象作用に屬せるある事

實から説明してゐる。ロック、ヒューム及びカントが構圖(コンシユトルイールテン)したところの認識する主觀の脈管の中には、現實の血でなく單なる思惟活動としての理性の稀薄な液汁が流れてゐるのだ。併し全人間を歴史的に心理學的に取扱ふことは私を導いて、その多樣なる力を發揮しつつ具體的なものに實際に欲望を起し、感じ、表象するこの生存體(ヴエーゼン)を、認識及びそれの諸概念（外界、時間、實體、原因の如き）の説明にでも――たとひ認識が認識のこれらの概念をただ知覺作用(ヴアールネーメン)、表象作用(シユテツレン)及び思惟作用(デンケン)の素材からのみ織り成すやうに見えようとも――根柢に置くやうにさせた。それ故茲に起つて來る試みの方法は恁うである。私は現代の抽象的、學的思惟のあらゆる成素を、經驗、言語や歴史の研究、これらが表示するが如き全人間本性に卽かせ、それから遊離させず、かくしてそれが聯關を探し求める。かくすると茲に、吾吾が持つ實在(ヒルト・デル・ヴイルクリツヒカイト)像及び實在の認識の最も重要なる諸成素、例へば人格的生命統一、外界、吾吾の外なる諸個體、時

間の中に於ける諸個體の生命及び諸個の相互作用(ヴエクゼルヴイルクンク)、これらのものが出て來る、しかしそれらすべては、それの〔人間本性の〕實在的生命過程(レアーレル・レーベンスプロツエス)は意欲作用(ヴオツレン)、感受作用(フユーレン)及び表象作用(フオールシユテツレン)にあつてはただ其の諸側面を有するに過ぎないところの全人間本性から説明され得るのである。吾吾の認識能力のある硬いアプリオリの想定ではなくて、吾吾の本質の總體(トータリテート)から出發する發展の歴史（Entwicklungsgeschichte）がひとり、すべて吾吾が哲學に卽いて質さねばならぬ、諸の疑問に解答を與へるのである。

さて、この根據づけに落ちかかるすべての謎の中最も執拗なるもの、卽ち吾吾の外界の實在性の確信の根源と權能に就いての疑問を解かんとすることが、ここに現れる。外界は單なる表象作用にとつては終始ただ現象(フエノメーン)たるにとどまる、これに反して、意欲し、感じ、表象する吾吾の全本質に於ては、吾吾の自己(ゼルブスト)と同時に而もこれと同じ確さで外的實在(オイセレ・ヴイルクリツヒカイト)（卽ち吾吾から獨立せるある別の自

己、それの空間的諸規定から全く別ものとして）が與へられてゐる、それが故に生命としてであつて、單なる表象作用としてではない。吾吾はこの外界に就いては、結果から原因へのある推理若くはこの推理に該應するある過程によつて、知るのではなく、むしろ結果と原因についてのこれらの諸表象そのものこそは吾吾の意志の生活からとり出された諸抽象に外ならない。かくすると、何よりも吾吾自身の内的狀態についてのみ知らせるものと思へた經驗の視野が廣く開けてくる、吾吾の生命統一と同時に吾吾にある外界が與へられてゐ、他の生命諸統一が存在する。しかし、このことをどの位の範圍まで表明し得るか、それから更に進んで、如上の立場から社會と歷史についての認識のある安定ある聯關をうち建てることが一般にどの位の範圍まで成し遂げられるかに就いては、根據づけそのものに關する讀者のこれから後の判斷に委ねられねばならない。

今私は、精神諸科學のこの認識論的根據づけの主要な諸思想と諸命題を現代

の學的思惟の種種なる側面と關係させ、これによつて多樣に重複に基礎づけを成遂げんとするに、或る煩瑣（ウムシュテントリッヒカイト）を避けようとしなかつた。それでこの試みは先づ精神の特殊諸科學に對する概觀から出發する、といふのはこれらの特殊諸科學の中にかかる全勞作の廣大な資料と動機とが伏在してゐるから、そしてこの試みはそれら特殊諸科學をなほ背後へと推究を進める手がかりとするから（第一編）。次いでこの一卷は、知識の確固たる基礎を求め、哲學的思惟の歷史を、それが中にあつて形而上學的根據づけの運命が決定を受けたところの全時代（ツァイトラウム）を通じて、辿つてみる（第二編）。ある一般に承認せられた形而上學が、吾吾が吾吾の既に後ろに殘し去つた諸科學のある形勢（ラーゲ）によつて制約を受けてゐたこと、而してそれ故に精神諸科學の形而上學的基礎づけの時代は全く過ぎ去つたといふ證明が試みられる。第二卷は何よりも特殊諸科學及び認識論の階梯に於ける歷史的經過を追ひそして現代に至るまでの認識論的諸勞作を叙述しこれ

を評價するであらう（第三編）。第二卷は次に精神諸科學のある固有の認識論的根據づけを試みるであらう（第四第五編）。歷史的部分（ヒストーリツシエル・タイル）の詳述は、ある概説（アインライトウンク）の實際的必要からのみならず、認識論的自省（die erkenntnistheoretische Selbstbesinnung）の價値についての私の確信から、現はれたものである。この同じ確信は、多くの時代（ゲネラチオーン）を通じて維持される哲學史に對する偏愛の中に、並びに、哲學の體系を歷史的（ヒストーリツシュ）に基礎づけようとするヘーゲル、後期のシェリンク及びコントの試みの中に齊しく表現されてゐる。この確信の正當さは發展（エントヴイックルンクスゲシヒトリツヘル・シユタントプンクト）史的立場に立つて愈明白となる。何故といふに知的發展の歷史（ゲシヒテ）は、一樹木の生長を太陽の明るい光の中に示すものだから、そしてその樹の地下にある根を探求するものが認識論的根據づけなのであるから。

私の課題は大層種種雜多な知識の野を通つて私を導いた、それで多くの謬見

が出て來るに違ひないであらう。ねがはくはこの著作が、幾分なりとも法律家や政治家、神學者や歷史研究家が、それらの特殊諸科學の多產な考究に對する基礎として要求する歷史的及び體系的諸洞察の綜括を合一せんとする、その課題に副はんことを期する。

この論文は、私がシュライエルマッヘルの傳記の完成によつてある古い責務を履行しとげぬ先に、世に現はれる。この傳記の後半のための準備（フオルアルバイテン）の仕事の結了の後、シュライエルマッヘルの體系の叙述と批判は到るところ、先づ哲學の究極の諸問題に對する解明を前提としてゐたといふことが、この仕上げ（アウスアルバイトウンク）に當つて明らかになつた。それ故傳記の方は、私にかかる解明を濟まさせてくれることになるこの書の出版さるまでは、控へて置かれることになつた。

千八百八十三年基督復活祭、伯林にて

ヴィルヘルム・ディルタイ

それに於て、根據づける科學の必須たることが明證さるべき、精神の特殊諸科學の聯關に對する概觀

「且又これまで實在は、忠實にそれの法則に從つて探究しつ
いつた學に對して、かの神話的想像や形而上學的思辨の最
大の努力が、それを描出し得たよりもはるかにけだかく、
はるかに豐かにその姿を露した。」　ヘルムホルツ

一　この精神科學序說の意向

ベーコンのかの名聲ある著作以後では、自然科學の基礎と方法を詳かに吟味し、そしてこれを自然科學の研究に取り入れた書物は、特に自然科學者によつて著はされてゐる、それらの書物の內で最も知られたものはサー・ジョン・ハーシェルのそれである。歷史、政治學、法律學、經濟學、神學、文學若くは藝術に從事せる人人に相似かよへるある役立ちを果さしめるといふことがある必要事と思はれた。上述の諸學に身を委ねる人人は、社會の實際的必要から、社會の諸の指導器官にそれら諸器官が成遂ぐべきそれ自らの課題に對して必要な知識を備へしめる職業敎育の目的から、上述の諸種の書物に近づき勝ちである。併し、この職業敎育は、それが技術的訓練のめやすを越えるに比例して、個人

に愈優れた諸業績を果さしめる力を與へるであらう。社會は無數の人（ウンツエーリゲ・ペルゾーネン）の奉仕によつて進行せしめられる一つの大いなる機械運轉に比較し得られる。各自の特殊職業上の孤立的技術をその技術に躋躋されて身につけられた人は、たとひ彼が如何にこの技術に通達してゐても、その生涯を通じてこの運轉の一つの特殊點に關はつてゐる一個の勞働者の位置にあるといふべきである、彼を動かすところの諸の力を知らない、實にこの運轉の他の諸部分及びそれらの全體の目的への共働とについて何らの觀念を持つてゐない。彼は社會の何かに役立つ一個の器具であつて、自らを意識しつつ共共に形成しゆく社會の器官ではない。この序論は政治家や法律家に、神學者や教育者にとつて、彼らを指導せる諸の命題と規則との人間的社會の包括的實在（ヴイルクリツヒカイト）に對する地位を知悉するといふ課題を、容易にするものである、蓋し、人間的社會なる包括的實在は、彼が其處へしつくり嵌込んでゐる其點に卽いて、彼の生涯の仕事がそれへ捧げられて

ゐるところのものだから。

この課題を解くに要する諸の洞察が、自然ならびに歷史的-社會的世界（die geschichtlich-gesellschaftliche Welt）の認識の根柢に存せざるを得ない諸眞理に溯りゆくといふことは、實に對象の本性に存することである。かく考へ來ると、實際生活の諸種の要求に基づいてゐるこの課題は純粹理論の事情が提出するある問題に遭遇する。

歷史的-社會的實在（die geschichtlich-gesellschaftliche Wirklichkeit）を自らの對象とする諸學はかつて以前になされたよりもはるかに熱心に諸學相互の聯關と基礎づけを求める。既成の特殊諸科學の情勢の中に存する諸原因は、フランス革命以來の社會の諸種の動搖から起るところの一層力强い刺戟と共同してかかる傾向に於て作用する。社會の中に有力に働ける諸種の力、社會の動搖を引き起した諸原因、社會の中に現存せる健全なる進步の諸の方策、これらにつ

いての認識は吾吾の文明にとつては、ある死活問題となつてゐる。それ故自然の諸科學に對して社會の諸科學の意義が生長する、かくて吾吾の現代生活の大いなる多次元の中に科學的關心のある改變が行はれる、この改變は實に紀元前五世紀及び四世紀にあつて見られし科學的關心の改變に酷似してゐる、卽ちこの國家社會（ユーダーテンゲゼルシヤフト）に關する變動が、ソフィスト的自然法の消極的理論とこれに對するソクラテス學派の國家に就いての諸勞作とを、生ぜしめた改變である。

二　精神諸科學は自然諸科學と並存する

一個獨立の全體

歷史的—社會的實在を對象とする諸學の全體は、この著作に於ては、精神科學（die Geisteswissenschaften）の名のもとに總括される。それあるが故にこれらの學が一全體を構成するに至る其の概念、この全體が自然科學に對してとる其の區劃、これは研究（ゲエルク）そのものに於てはじめて決定的に解明を受け基礎づけ得られる、ここでこの研究の始めにあたつて、吾吾が此の言表を用ひるその意味を確定し、そしてその中にあつてはじめて精神科學のかかる統一的全態と自然の諸科學との區劃が基礎づけられ得るところの事實總體（タートザツヘインベグリフ）をまづ一應指示する。

言語の慣用は科學を解して次のやうな意味の諸命題の總體と考へる、すなはちそれの諸要素は概念であり、換言すれば完全に規定せられてあり、全思想聯關中にあつて不變（コンシュタント）で普遍妥當的なるものであり、それが結合は基礎づけ得られ、遂にはそれに於て部分が傳達の目的で全體に結ばれてあるが如き總體と、考へる、といふのは科學にあつては實在の一成素が諸命題のこの如き結合によりて完全さを得て思惟されるか、それとも人間的活動の一分肢（ツヴァイク）がこれによつて規整づけられるかいづれかであるから。それ故に吾吾はこの場合、それに緣つて上述の徵表が存し、そしてかるが故に一般に科學の名稱がそれへ適用されるかかる精神的事實のあらゆる總體を科學といふ言表で呼ぶ、吾吾はこれに應じて吾吾の課題の範圍を先づ一應提示する。歴史的に人類（メンシュハイト）に於て發展し來、そして一般の言語の慣用に從つて人間、歴史、社會の科學といふ稱呼がそれへ持つて行かれて來たところの此の精神的事實が、實在（ヴィルクリッヒカイト）を、吾吾が制御しようと

いふのではなくて何よりもまづ摑みたいと思ふところの實在を構成するのである。經驗的方法は、諸科學そのもののかやうな存立狀態に緣いて、思惟がこの場合自分の課題の解決のために使用する個個の取扱方法の價値が歴史的-批判的に解展（エントヴィッケルン）されんこと、尙またその主體は人類そのものであるところのこの偉大なる過程の直觀に緣いて、この領域に於ける知識と認識の性質が明瞭にされんことを要求する。かかる方法は、近頃餘りに屢所謂實證論者達から用ひられた方法とは反對せるものである、實證論者達は主として自然科學的研究事業の中に生ひ立つた知識の概念規定から學なる概念の內容を引き出し、この內容に資（もとづ）いて、如何なる知的從業に學の名稱と地位が與へらるべきかを決定する。あるものは、知識についてのある肆意的概念から出發して、偉大なる巨匠達が成し遂げた歴史記述（ゲシヒトベシュライブンク）に對して短見にして高慢にも學の地位を拒んで來た、また他のものは當爲的規則（インペラティーフ）をそれが基礎に有する諸學を、實在に對し加

へられる判斷にでは決してなく、實在の認識に改造しなければならぬと信じて來た。

學のこの概念に包攝せられる精神的事實の總體は二つの節成的部分(グリーデル)に分かたれがちである、その内の一つは自然科學の名によつて呼ばれる、他の一つに對しては一般に認められた稱呼が、このことは充分注目に價するが、存してゐない。私はこの他半の叡智界(globus intellectualis)を精神科學と呼ぶ思想家達の用語例に與する。まづ最初この呼び名は、少からずジョン・スチュアート・ミルの論理學が廣く普及されたことによつて、用ひ慣れ、一般によく通じ得る稱呼となつた。かくしてこの稱呼は、他のすべての不適當なる稱呼(これにもまた賛否はあるが)と比較されてみると、まづ最も不適當さの少いものと思はれる。この稱呼はこの研究の對象を言ひ表はすことが甚だ不完全である。何故なればこの研究そのものにあつては精神的生活の事實は人間本性(メンシエンナトゥール)の精神-物理的生命統

一から分かれてゐないから。社會的-歴史的事實を記述し分析せんとする理論は人間本性のこの總體(トータリテート)を度外視し精神的のものに自らを局限することはできない。然るにこの言表はしは、已に適用されてゐる他のあらゆる言表はしとこの缺點を分有してゐる。社會科學(ゲゼルシャフツヴィツセンシャフト)(社會學(ゾチオロギー))、道德的、歴史的文化科學、すべてこれらの稱呼は、それらが言ひ表はすべき對象に關して餘りに狹隘であるといふ同一の缺點を受けてゐる。さて此處に撰ばれた名稱は少くとも次のやうな優越は持つてゐる、すなはち、其處から實際にこれらの諸學の統一が見られ、範圍が圖取りせられ、未だ不完全ではあるが自然科學に對しての區劃が、なされて來たところの中心的事實圏を適當に示す、といふ優越である。

これらの諸科學を一統一として自然の諸科學から區劃する習慣がそこから出立してゐるところの動源(ベヴェークグルント)を探ると人間の自己意識の深さと總體(トータリテート)の中に這入つてゆく。未だ精神的のものの根源についての探求に觸れてではないが、人

間はこの自己意識のなかに、意志のある主權、行爲に對するある責務、すべてのものを思想に下屬せしめ、そしてそれによつて人間が自然から分けられてゐるところの彼の人格の城廓内の自由（Burgfreiheit）によつてあらゆるものに對抗する能力、これらのものを見出す。人間はこの自然の中で、スピノザの言葉を藉れば、帝國の中の帝國[一]（imperium in imperio）として存在する。彼にとつては彼の意識の事實であるもののみが存立するが故に、意識裡にあつて自立的に働いてゐるこの精神的世界に於てこそ、あらゆる價値、あらゆる生命の目的は横たはつてゐ、精神的事態の調成（Herstellung）の中にこそ彼の行爲のあらゆる目標は存してゐる。かくてはじめて人間は自然の世界から歴史の世界を分かつ、歴史の世界にあつては自由が、客觀的必然性の聯關すなはち自然の眞ただ中にありながら、この全體の無數の點に緣つて閃き輝く。歴史の世界にあつては意志の所業は、自然の諸變化の機械的推行すなはち推行のなか

に成果するすべてのものを既に未發的材料のかたちで含んでゐるやうなあの機械的推行とは反對に、それが意義は實に個人がその經驗中に現に所有せるところの自分の力の消費と犧牲とを通じて、個人の中に人類の中に實際の或ものを產出し發展を遂行するものである、かうした意志の所業は、偶像崇拜者達が心にゑがいてもつて歴史的進歩の理想と考へることに耽つてゐるかの意識に於ける自然經過の空虛不毛の繰り返しを、はるかに越えてゐる。

形而上學的時代、この時代にとつては說明根據の如上の相違は、直ちに世界聯關の客觀的節成に於ける實體的相違として現はれたから、精神的生活の事實と自然過程のそれとの區別の客觀的基礎に對する法式を確定し基礎づけようと努めたものの言ふまでもなくそれは無益であつた。中世の思索家達に於て古代の形而上學が受けたすべての變化の中で最も效果のあつたものは、今や、それらの思索家がその中に住んでゐたあのすべてを支配せる宗教的神學的諸運動と

連關して、精神の世界と物體の世界の相違、尙またこれら兩世界と神（ゴットハイト）との關係の決定、これらが體系の中心點に來たことであつた。中世の形而上學的主著、トーマスのカトリック信仰の眞理に就いて（de veritate catholicae fidei）の總計は、（その第二卷からは）創られた世界の節成を略圖的に示してゐる。この世界に於ては本質性（ヴエーゼンハイト）（essentia quidditas）と存在（ザイン）（esse）とは別種のものである、尤も神そのものに於てはこの兩者は一つである。[二] 創造せられたものの統成（ヒーラルヒー）に於ては精神的諸實體はある最高の必然的節成的部分（グリード）となつてゐる。これらの實體は質料と形式から成るのではなくて、それ自らで立てる形體なきもの（per se körperlos）である、卽ち天使である。さてこれらの實體と區別されて知的實體或は非物體的自立的形相の方は自分の種（Spezies）（すなはち種とは人間である）を自らの內に含むために物體を必要とするものとされてゐる、そしてこの點に於て人間精神（メンシエンガイスト）の形而上學が發展したのであつた、それはアラビアの哲學者と戰

ひ、その影響は吾吾の時代の最近の形而上學的思想家にまで辿り得られる形而上學である。[三] 不滅の實體のこの世界から形式と質料の結合の中に自らの本質を有するところの創られたるものの部分は區劃されてゐる。精神のこの形而上學（ラチオナーレ・プシコロギー）（合理的心理學）は、その後すなはち自然聯關の機械的解釋と粒子哲學が支配するやうになつた時、卓越せる他の形而上學者からこれらと關係せしめられた。しかし、新しい自然解釋を取り入れたこの實體說に基づいて、精神と物體の關繫（ルトニス）の根據ある表象を作り上げようとしたどの試みも坐礁を免れなかつた。デカルトは空間量をもてるものとしての物體の明晰にして判明な性質を基礎として、自然を巨大なる一つの機構だと表象する自然解釋を發展したが、彼はこの一全體の中に存する運動量を不變だと考察した、そこで唯一個の心靈（ゼーレ）ではあるがこの物質的體系の中に一つの運動を產出するといふことを是認したのでここに、その體系の中に矛盾が這入つた。そして非空間的諸實體がかの擴がりを持

つ體系へ作用を及ぼすといふ表象の不可能は、彼がかかる相互作用の空間位置を或る一點に引き集めて限定したにしても、少しも減ぜられなかつた。彼はこれでもつて難點を取除かんとしたのであつたらうけれども不可能は消えなかつた。神（ゴットハイト）が絶えず繰り返す交渉によつて交互影響のこの運轉（シュビール）を維持するといふ見解、寧ろ神が最も熟練せる細工人として、物質的體系と精神世界の二つの時計を最初から、自然の一過程が一個の感覺を呼び起し、一つの意志作用が外界の一變化を引き起すやうに見えるといふ工合に仕掛ける、といふもつと違つた見解の冒險は、自然の新しい形而上學が傳承の精神的實體の形而上學と一致せざることを能ふ限り明瞭に證明した。かくしてこの問題は形而上學的立場一般の解決へ向けられたるたえず刺戟しつづけたとげとして働いた。この解決、はこれから發展さるべき認識卽ち自己意識の體驗が實體概念の出發點であるといふこと、この概念は、根據の法則に從つて進行する認識（エルケンネン）が成遂げるところ

のかの外的經驗へのこの體驗の合致から出て來るものであること、そしてこれらの精神的實體の理說は、かかる變形（Metamorphose）に於て作り上げられた概念が、この概念の萠芽を根源的に含んでゐる體驗へ、戻して見られることに外ならないといふこと、かくの如き認識を俟つてはじめて完全に成遂げられるであらう。

物質的諸實體と精神的諸實體の對立の代りに、ここに外的知覺（感覺）に於て感官を通じて與へられたものとしての外界と始原的に心的事件（プシヒッシエ・エルケイクニッスエ・ウント・テーと活動（テイヒカイテン）の內的把握（反省）を通じて現はされたものとしての內界、この對立が出て來た。問題は、中庸を得てゐるが併し經驗的取扱の可能性を內に含めるあ、る表現法（ファッスンク）を得た。そして今や新しいよりよき方法に面しつつ、合理的心理學の實體概念說の中で學的には堪へ得られぬ言表を見出したあの體驗が重要視さるに至つた。

何よりも、次のことは精神諸科學の獨自の構成（Konstituierung）にとつて申分のないことである、この批判的立場に立つて、感官に於て與へられたものの材料に資づいて、そしてこの材料に資づいてのみ思惟的結合を通じて構成されるところの諸過程から、ある特種の一範圍の事實としての他の諸過程が、なほ詳細にいへば內的經驗の中で、それ故に感覺のあらゆる共働なくして始原的に與へられてあり、かくして次にこの始原的に與へられた內的經驗の材料に資づき外的自然過程に機因されて形成される事實、從つてこのために、實行の上では類推に等しいある取扱ひによつて、自然諸過程に入れられがちの事實の或特殊の一範圍としての他の諸過程が分けられるといふこと。さうするとここに內的體驗の中にそれに獨自の根源と材料を有する經驗の領域が生ずることになる、從つて當然この領域は特殊の經驗學の對象である。そして誰しも、熱情、詩的形成力（ゲシユタルテン）、思惟的案出、これらの總て、これを吾吾はゲーテの生活と呼ぶが、を

腦髓の構造、彼の身體の諸性質から繹（ひ）き出されもしまたより明瞭に認識せしめ得られると主張しない限りは、かかる學の獨自の立場を言ひ爭ふとはしないであらう。吾吾にとつて定在するものはこの內的經驗に倚りて立ち、吾吾にとつて價値を持つもの或は目的であるものは吾吾の感情と意志の體驗の中にのみ與へられてある。かるが故にこの學の中にこそ、自然はどれだけの範圍で吾吾にとつて存在し得るかについて決定する吾吾の認識の諸原理、尙又自然との實際的交涉の基礎である目的、貨物、價値、これらの現存を說明するところの吾吾の行爲の諸原理が存してゐるのである。

自然科學と並んで精神科學の持つ獨自の地位の深入つた基礎づけは、この地位はこの研究書では精神科學の構造の中心點をなしてゐるが、この書そのものに於て一歩一歩成遂げられる、それには精神的世界の全體驗の分析が、自然についてのすべての感覺經驗と體驗とが同列には置かれぬ點に留意して、この書

に於て周到に行はれる。わたしはここではこの問題をただ次の點に留意して明らかにして置かう、この二つの事實圏の非同列性が主張され得るにはそれに二重の意味のあること、それに應じて又自然認識の限界の概念も二重の意義を受けるといふこと。

獨逸の第一流の自然研究者の一人が廣く人口に膾炙せるある論文でこの限界を規定することを企て、そして彼の學のかくの如き限界決定を詳細に説明した。[四]物體界に於けるすべての變化は、それの不變の中心力によつて働きを惹き起されるならん諸のアトムの運動なりと解釋し得られるものだと考へると、宇宙(ヴエルトアツル)は自然科學的に認識されることになるであらう。「ある精神」――彼はラプラスの如上の見解から出發する――「卽ち與へられたある瞬間、自然の中に働いてゐるすべての力を知り、それでもつて自然が成り立つてゐる諸性質(ヴエーゼン)の相互狀態を知つた精神は、尙且つこの精神がこれらの報告知識を分析下に持ち來たすに

充分周到であらうとも、最も大とすべき諸天體と最も輕微なるアトムの運動を同一の法式で把へようとすることになるであらう。」[五]人間の知力は星學的科學に於ては「かかる精神の影薄き模寫」であるが故にデュ・ボア・レーモンはラプラスの表象せる物質的體系の知識を星學的知識と呼ぶ。人人はこの表象から實際に自然科學的精神の傾向がその中に局限されてあるところの限界の非常に明瞭なるある解釋に達する。

自然認識の限界の概念に關してのある區別をかくの如き考察方法に導き入れたいと思ふ。吾吾には實在(ヴイルクリツヒカイト)は、經驗の相關としては、吾吾の感官のある節成(グリーデルンク)と內的經驗とが、共働することに於て與へられるが故に、これによりて制約されたる實在(ヴイルクリツヒカイト)の諸成素の出處(プロフエニエンツ)の相違から吾吾の學的計算の諸要素內の非同列性が出て來る。この非同列性は或一定の出處の事實性から他の出處の事實性を繹き出すことをやらせない。だから吾吾が物質の表象を有するに

は、空間的のものの諸性質に資づき、而も抵抗が經驗せらるかの觸感覺の作(ツアクテ)爲(イチテート)を介しなければならない、どの感官もそれに特有の性質圏(クアリテーツクライス)に局限されてゐる、吾吾がある與へられた瞬間に於けるある意識狀態を把捉すべきならば、吾吾は感官感覺から內的狀態(インネレ・ツーシュチンデ)の領認(ゲヴァーレン)に移らねばならない。それ故に吾吾は與料をば、與料はそれの種種なる出處に從つての非同列性をもつてあらはれるから、非同列性に於てただ受け容れ得るに過ぎない、與料の事實性は吾吾には測り知られざるものである、畢竟吾吾の認識は繼續と同時性に於ける齊一性の確定(die Feststellung der Gleichförmigkeiten)といふことに限られてゐる、この齊一性に應じ且つ吾吾の經驗に從つて與料は相互關係に這入るのである。これは吾吾の經驗作用そのものの條件の中に置かれてある限界である、自然科學のあらゆる點に緣(ね)いて生ずる限界である、自然認識作用(ナトゥールエルケンネン)がそれに衝き當るやうな外的境界ではなくて經驗作用そのものに內在する自然認識作用の條件であ

る。このやうに認識の內在的境界が存在すといふことは認識の職能に對して全く如何なる妨げともならない。さて、若し人人が概念作用(ベグライフェン)をばある聯關の把捉に於ける完全な見透(ドゥルヒジヒティヒカイト)しだと呼ぶならば、吾吾はその把捉が衝き當るべき境界を問題とせねばならない。しかし、實在の中の諸變化をアトムの運動に還元する科學が、性質(クアリテーテン)を若くは意識事實を、もし意識事實がさう取扱はれるならば、學の計算下に持ち來すか否かには拘はらず、非演繹性の事實はこの學の運用の如何なる妨害にもならない、私は單なる數學的規定や運動量から色或は音への轉移は、ある意識過程へのそれと同樣に、これを見出すことはできない、青い光りはそれに該當する振動數によつては私には說明とはならない、宛も否定判斷が腦髓に於ける一つの過程によつてはこれが說明とならないと同樣に。感覺性質(ジンネスクアリテート)を青いと說明することを物理學が生理學に委ね、物質的部分の運動の中で青き色を現出(ヘルフォールツアウペルン)せしめる如何なる手段も持ち合はせない生理學は

それを心理學に讓り渡すことによつて、宛もある手品遊びに於けるがやうに、終にそれは心理學に居坐ることになる。しかし、性質（クアリテーテン）を感覺の過程中に生ぜしめる假說はそれ自體でいふとただ補助手段に過ぎない、すなはち私の經驗に於て與へられてゐるままの實在の中の諸變化を、その同じ實在の中の變化で私の經驗のある部分內容を構成するさういふ或る級の變化に基づかしめる計算の爲のある補助手段である、尤もこれは實在中の諸變化を認識の目的のために一つの平面に移して了ふことになることは言ふを俟たない。若し機械的自然觀察の聯關の中である確定せる位置を占めるところのはつきり定義せられた事實に、不變的にそしてはつきりと定義せられた意識事實を置き換へ、尙又前者の事實がその中に引出される同形性（グライヒフエルミツヒカイト）の體系に適合して意識諸過程の生起（アイントウレーテン）を經驗と全く一致させて規定することが可能だといふならば、しかるときはこの意識事實は、それが何か音或は色である場合の如く、自然認識の聯關に組み

入れられることにならう。

しかし、まさしくここに物質的過程と精神的過程の非同列性は全くもつと異つた理解に於て明らかになりそして自然認識（ナトウールエルケンネン）に全然異つた特性の限界を劃する。精神的事實を機械的自然界の事實から引き出すことの不可能、これはそれらの事實の出處の相違に基づいてゐるが、前者を後者の體系の中へ入れ組むことを妨げない。精神的世界の事實間の諸關係は、自然過程の諸同形性とは、機械的自然認識（ナトウールエルケントニス）が已に確定したところのものの內に精神的事實を下屬せしめることは斥けられるといふ仕方で、同列的でないと明らかになつたとき、然るときはじめて經驗する認識（エルフアーレンデス・エルケンネン）の內在的境界が示されたのではなくて、そこで自然認識が終りをつげて精神的事實特有の中心點から形成される一つの獨自なる精神科學が始まる限界が示されたのである。それ故に根本問題は、精神的事實の諸關係と物質的諸過程の諸同形性の間の一種特別の非同列性、物質の性質

や部面を取扱ふかのやうに精神的事實を整配したり解釋したりすることを斥けるかかる非同列性、だから物質の諸法則の個個の圈の間に成立する相違性すなはち數學、物理學、化學、及び心理學が階段的に漸次に精確になりゆく下屬關係をなして示してゐるやうな相違性よりも全然趣きを異にせる非同列性、かやうな非同列性を確定するといふことにある。物質の聯關から及び物質の性質と法則の聯關から精神の事實を閉め出すことは、一方の領域に於ける事實の諸關係と他方の領域に於ける事實のそれとの間にかかる下屬的配列の試みがなされるに當つて這入つて來る一つの矛盾、この矛盾をいつも前提理由とするであらう。そして實際にこれは、自己意識の事實及び自己の意識と關聯する意識の統一、尙また自由及び自由と結ばれる道德的生活の諸事實、これらに緣りて精神的生活が物質の空間的節成(グリーデルンク)と可分性並びに、それが下に物質の個個の部分の作業が立つところのかの機械的必然性とに對してとる非同列性が明らかになる

時に生ずる信念である。意識の統一と意志の自立性の諸事實に基づける、精神的なものとすべての自然秩序との非同列性のこの種のある法式化の試みは、自然に對する精神の位置についての嚴密なる考察と殆ど同じやうにすでに古くから存するものである。

一方では經驗作用(エルファーレン)の內在的境界について他方では自然認識の聯關の內に事實を下屬せしめることの限界についての先に試みた區別を、この名聲ある自然研究者の說明の中に導き入れて見ると、ここに限界及び非說明性の概念が細かに定義し得られる意味を得て來る、そしてそれと共にこの自然研究者の書物から呼び起された自然認識の限界に就いての論爭に於て顯著になつて來た難點も消える。經驗作用の內在的境界の存在は、精神的事實を物質の認識の聯關の內に下屬せしめることの問題に對しては、何ら決定するところがない。ヘッケルやその他の研究者に於ける樣に、有機體(オルガニスムス)を作りあげてゐる諸成素の中に心的活力(プシヒッシエス・レーベン)

のあることを認めて、精神的事實を自然聯關の內に組み入れるといふ試みが提說される場合、さういふ試みとすべての經驗作用に內面的境界を認めることとは決して拒み合ふものではない。この試みに對して決定をあたへ得るものは自然認識の限界の第二の考察のみである。それ故にデュ・ボア・レーモンも亦この第二の考察に進み、彼の論證には意識の統一の論據並びに意志の自發性の他の論據を用ひてゐる。「精神過程はそれの物質條件からは決して理解さるべきでない」[六]といふ彼の證明は次の如くに行はれる。物質的體系のすべての部分、それらの相互狀態及び運動について完全に知り得ても、かかる體系のすべての部分の存在及び運動の如何がどうして炭素、水素、窒素、酸素の各アトムの數に無關係であつてはならないかは全然理解できないでゐる。精神的のものこの非說明性は、これらの諸要素にモナード說の遣り方でその一つ一つに意識を具へさせた場合も全く變りはない、しかもこの假定では、個性の統一的意識は說明

され得ない。[七]證明さるべき彼の命題がすでに「決して理解さるべきでない」といふ言表の中に二重の意味を含んでゐる、そしてこの二重の意味は證明そのものに於て全く異れる效果範圍の相並べる二個の論據が出て來ることに歸着する。彼は、一方では物質的變化から精神的事實を引き出す試みは（これは今や粗笨なる唯物論として忘却され、ただ要素に心的性質を取り入れる仕方によりてなほ企てられるに過ぎない）すべての經驗の內在的境界を除去することを得ないと、主張する、このことは確實である、が然し精神を自然認識作用の內に下屬せしめることに對しては何ら決定するところがない。他方では、この試みは吾吾の有する物質の表象と吾吾の意識に歸せらるべき統一の性質、この兩者の間に起る矛盾に當つて挫折せねばならないと主張する。彼はヘッケルに對する後年の論爭に於てはかの論據に加へるに此論據、すなはち、かかる假定（アンナーメ）が立てられると、自然聯關に於ける物質的成素が機械的に條件づけられるその仕方（アルト）と

意志の自發性の體驗との間の更にもう一つの矛盾が出てくる、「意欲すべきである」(物質の諸成素より成る)「ある意志」、「この意志が意欲することもあり得またあり得ないこともあるそしてそれは質量の相乘積に正比例し、距離の自乘に反比例する」とは形容語矛盾(コントラディクテイオ・イン・アドウエクト)〔八〕であるといふ論據をもつてする。

註〔一〕パスカルはこの生命感情(Lebensgefühl)を大層天才的に言表はしてゐる。(Pensées Art. I)「これらの全ての悲慘――が彼の偉大さのあかしである。それは太守の悲慘であり、ひとりの廢王の悲慘である。」(三)吾吾は卑められるのを忍ぶことが出來ず、又たましひを尊敬しないのを忍ぶことが出來ない程、吾吾はかくも偉大なる觀念を人間のたましひに就いてもつてゐる。」(五)(Oeuvres Paris 1863 I, 248, 249).

〔二〕Summa c. gent. (cura Uccellii, Romae 1878) I, c. 22. vgl. II, c. 54.

〔三〕Lib. II, c. 46 sq.

〔四〕エミール・デュ・ボアレーモンの „Über die Grenzen des Naturerkennens" (1872) 尙 „Die sieben Welträtsel" (1881) 參照。

〔五〕ラプラスの "Essai sur les probabilités." (Paris 1814. p. 3.)

〔六〕と、彼は始める。„Über die Grenzen des Naturerkenntnis" (4. Aufl., 8. 28.)

〔七〕A. a. O. 29. 30. vgl. Rätsel 7. この提論はただ、若し原子論的機械論に所謂形而上學的妥當性が負はされる時に、ひとり決定的なものとなる。デュ・ボア・レーモンによつて說かれたるこれの歷史には、かの合理的心理學の古典的學者、メンデルスゾーンに於ける形式化がまた比較され得る。例へば一八八〇年ライプツィヒ版の論文(一八八〇年ライプツィヒ版一、二七七頁)に、第一「人間の肉體が持つもので大理石像よりは別な物は、みな運動に還元されてしまふ。さて、運動とは場所或は位置の變化に外ならない。明らかに、世界に於けるすべての可能なる場所の變化によつては、たとひ如何に聯繫されようとも、これらの場所の變化の知覺は決してかち獲らるべきではないことが解る。」第二「すべての物質は多數の部分から成る。自然に於ける諸對象の如くに。若し心靈の部分に於て個個の諸表象が同じく孤立するならば、全體は決して出現しないであらう。我我は諸感覺の印象を比較することもないであらう。諸表象を對照してみることもないであらう。何等の關繫をも知覺せず何らの關係をも認識し得ないであらう。ここよりして單に思惟に對するのみならず、感覺に對しても多が

一なるものに於て結合されねばならぬことが明白となる。併し物質は決してある唯一の主觀とはならぬが故に、云云。」カントはこの「純粹心靈說のすべての辯證法的論斷のアキレス」を先驗的心理學の第二の論過として發展せしめた。ロッチェに於てはこの「關係をつける知識の行動」は「ある心靈體の獨立性の確信を確實に安定せしめる、打敗り得ぬ根據」として、多くの著作の中に（最後は形而上學の四七六頁に）發展せしめられた、そして彼の形而上學的體系のこの部分の基礎を形成してゐる。

〔八〕 Welträtsel S. 8.

三　この全體と自然科學の全體との關繫

さりながら、ある廣い範圍で精神科學は自然事實（ナトウールタートザツヘ）を包括してゐる、自然認識（ナトウールエルケントニス）を基礎に有つてゐる。

人人が、純粹に精神的なる諸の生存體（ヴエーゼン）を、ひとり精神的なものからのみ成立してゐる人格世界（ペルゾーネンライヒ）の裡に想像してみれば、其れの現出、持續、發展並びに消失（それらが其處から現出し、それへまた還つてゆく背景（ヒンテルグルント）をどんなものと考へるにしても）は精神的種類の諸條件に結びつけられてゐることであらう、其れの健在（ヴオールザイン）は精神的世界に面せる狀況に基づいてゐるであらう、其れの相互の結合、相互の行動は純粹に精神的な仲介（ミツテル）によつて成し遂げられるであらう、そして其れの行動の持續的影響は純粹に精神的種類（アルト）のものであらう、尙また人格の

世界からの其れの退行すらも精神的のものの中にそれが根據を有することであらう。かかる諸個體の體系は純粹なる精神諸科學に於て認識されるであらう。ところが、實際には個體は、動物的有機體の諸機能及びこの諸機能の周圍の自然過程に對する諸關係とに基づいて生起し持續し發展するであらう、個體の生命感情は少くとも部分的にはこれ等の職能に根據をもつてゐる、個體の印象は感覺器官と外界よりする其れの感動とによつて制約されてゐる、個體が有つ表象の豐かさと潑剌さ及び意志作用の强さと方向は個體の神經系統に於ける諸變化にいろいろの仕方で依屬せることを見出す。個體の意志衝動は筋肉纖維を收縮させる、そして其れの外方への働きかけは身體組織（オルガニスムス）の成分の布置に於ける諸變化に結びつけられてゐる、彼の意志行動の持續的成果は物質的世界内の諸變化の形式の中にあつてのみ實存する。だから人間の精神的生命とは、精神-物理的生命統一の、抽象によりてのみ解きはなされ得るある部分である、人間な

る存在、人間といふ生命（ein Menschendasein und Menschenleben）は畢竟かくの如き生命統一となつてあらはれてゐる。これらの生命統一の體系は、歷史的-社會的諸學の對象を構成する實在である。

そして生命統一としての人間は、（形而上學的事實（タートベシユタント）は何であらうとそれには拘らず）吾吾の把握の二重の立場のために、內的領認（ゲヴアールヴエルデン）のとどく限りでは精神的諸事實のある聯關として、これに反して、吾吾が感官をもつて把握する限りではある物體的全體として、吾吾に對して存在してゐる。內的領認と外的把握とは同一の作用の內に起ることは決してない、それ故に、吾吾には精神的生活の事實は、吾吾の身體の事實とは決して同時に與へられてゐない。此處から必然の結果として學的把握の二つの立場が、卽ち精神的事實と物體界とを其れの聯關から、この聯關の表現（アウスドゥルック）がとりもなほさず精神-物理的生活統一であるが、把へようとする學的把握に對して、相異れるが併し相殺し合ふことのな

い二つの立場が出て來る。私が內的經驗から出發するならば、全外界は私の意識裡に與へられてあり、この自然全體の法則は私の意識の條件下に立ち從つてこれに依屬してゐるのを見出す。これは十八世紀と今世紀の境目にあつて獨逸哲學が先驗哲學と呼んだ立場である。これに反して私が自然聯關を、それが實在性として私の自然的把握(アウフファッセン)作用に於て私に現はれるままに、迎へ、而してこの外界の時間的羅列と空間的分劃の中に心的事實は組み入れられてあると知るならば、尙又自然そのものが若くは實驗が行ふところの、而して物質的變化が神經系統に迫る時にこの物質變化に存する干涉に、精神的生活の變化が依屬するのを見出すならば、尙更に又生命の成長と病的狀態の觀察がこれらの經驗を擴げて精神的のものの物體的のものによつての被制約の包括的見解に達するならば、然るときここに、外から內へ物質變化から精神的變化へと迫りゆく自然研究者の把握が生ずる。かくの如くに哲學者と自然研究者の爭鬪は彼らの出發點

の對立によつて條件づけられてゐる。

さて、吾吾は吾吾の出發點を自然科學の觀察法から始めよう。この觀察法は自分の限界を意識してゐる限り、それの成果は確實であつて爭はるべき餘地がない。この成果はそれの認識價値の細かい規定をば內的經驗の立場からのみ受けとる。自然科學は自然過程の因果的聯關を分析する。この分析が、かういふ點に卽ちそこではある物質的事實(タートベシュタント)或はある物質的變化が規則正しくある心的事實或はある心的變化と結ばれてゐる點に達し、而もこの兩者の間にもはや中間節(ツヴィッシェングリート)が見出されるといふことがないならば、ただこの規則的關係そのもののみは確定されることができる、がしかし原因と結果の關繫(フエルヘルトニス)はこの關係へは適用され得ない。吾吾はある一つの生命圈(Lebenskreis)の同形性と他の生命圈のそれと規則正しく結合せることを見出す、そして函數(フンクチオーン)の數學的概念は、この關繫の言表である。この關繫に就いてのある解釋すなはち物體的變化

の推移と相並べる精神的變化の推移を二個の相合はされた時計の進行に比する解釋は、經驗とはよく一致する、ただ一個の時計を説明根據にとる解釋、比喩を離れて云へば、二つの經驗圏を一つの根源の異れる現はれ方と考へる解釋に於ても同樣よく經驗と一致する。それ故に精神的なものの自然聯關への依屬とは、それあるが故に一般的自然聯關が、吾吾にとつて規則正しく而もそこにはもはや認識され得る何らの仲介なくして精神的事實（ダートベシュタート）及び變化と結ばれてゐる物質的事實及び變化を、原因的に制約するところの關繫である。かくの如く自然認識作用（ナトウールエルケンネン）は、原因の連鎖が精神-物理的生命にまでその働きを及ぼしてゐる、ことを知る。精神-物理的生命に於ては、物質的なものと精神的なものの關係を因果的解釋で片づけることの許されないやうな變化が生ず、そして、この變化は飜つて物質的世界の中にある變化を呼び起す。生理學者の實驗に神經系統の構造の意義が顯はれるのはこの聯關のあるためである。生命の參差錯綜せ

る現象がかういふ依屬性卽ち其れの過程（フエルフオルク）を經て自然過程は諸變化を人間にまで連れて來、而してここにこの諸變化は感覺器官の門を通じて神經系統に入り込み、感覺、表象、感情、慾望が生じそしてまた逆に自然過程へ働き返へす、さういふ依屬性の簡明な表象に分析される。分割されてゐない此の私の存在といふ直接感情でもつて吾吾を充たしてゐる生命統一そのものが、吾吾の意識の事實と神經系統の構造並びに機能との間に經驗的に確定され得る諸關係の體系に分解される、何故なればあらゆる心的作用は神經系統に倚つてのみ吾吾の身體內の變化と結ばれて現はれ、そしてかかる變化は、それが神經系統へ作用することによつてのみ吾吾の心的狀態の變動に伴ふから。

さて諸の精神-物理的生命統一のかくの如き分析から次のやうな一層明瞭な表象が出て來る、すなはちこれらの統一はこれらの統一が畢竟その中で現はれ、作用し、またそれへ消えてゆくあの自然の全聯關に依屬し、從つて社會的-歷

史的實在の研究もまた自然認識に依屬するといふこと。この表象によつて、コントとハーバート・スペンサーが彼らの所定の全科學の統成（ヒーラルヒー）に於けるこれらの學の位置に就いて述べたる理說に與へらるべき正當さの度合が、確定されることができる。この書物は精神科學の相對的獨立性を基礎づけようと試みるであらう如く、同樣この書物は諸の依屬性の體系を、學的全總體中に於ける精神科學の位置の他の側面として、發展させねばならぬ、と云ふは、精神科學はこの諸の依屬性の體系あるによつて自然認識によりて制約せられてあり、それ故に、數學的根據づけに於て始まる組上げ（アウフバウ）の中で最後にして最高の節成的部分をなすものであるから。精神の諸事實は、自然の諸事實の最高の限界である。自然の諸事實は精神生活の下級の條件を構成する。人格の世界若くは人間的社會及び歷史は地上の經驗世界の諸現象中の最高の現象であるが故にこそ、これが認識は、無數の點にあたつて、これが發展のために自然全體の中に置かれてゐる

諸前提の體系の認識を必要とする。

かくして人間は、自然の因果的聯關に於ける人間の上述の如き位置の故に、自然から二樣の關係で條件づけられてゐる。

精神-物理的統一は、已に吾吾の知れる如く、神經系統によつて仲介されて一般自然過程から絕えず影響を受け、更にまた自然過程に働き返すものである。さてこの精神-物理的統一から出發する諸の働きかけが、主として目的によつて導かれるある行動として現はれるといふことは、この統一の本性に基因する。だから、一方ではこの精神-物理的統一に對して自然過程及びそれの性質が目的そのものの形成に關して支配的であり得、他方では自然過程は、かの目的の達成の手段の體系として、この統一に對して規定を與へるものである。そして吾吾が意欲し、吾吾が自然へ働きかける場合、といふのは吾吾は盲目なる力ではなく自らの目的を思慮しつつ確立する意志なのだから、だが併しかく働きかける

場合ですらも吾吾は自然聯關に依屬してゐる。それ故に精神-物理的統一は二重の依屬性に於て自然過程に對して存在してゐる。自然過程は、一方では宇宙的全體に於ける地球の位置から、諸原因の體系として、社會的-歴史的實在を制約する、而して、自然聯關とこの實在に於ける自由との關繫の重大の問題は、經驗的研究者にとつては、精神の諸事實と自然の諸の働きかけとの間の關繫に關する無數の個個の問題に分かれる。しかし他方ではこの人格世界の目的から自然への働き返へしが生れ出る、換言すればその中で人間が能動的に生存を營み得るといふ意味で彼が、棲家と考へてゐる地球への働き返へしが出來て來る、しかしこの働き返へしもまた自然法則的聯關の使用に結びつけられてゐる。凡そ目的は人間には精神的過程そのものの內に專ら横たはつてゐる。と云ふのは人間にとつてはこの精神的過程にあつてのみ或ものが確とそこに存在するのだから、しかし、目的はそれの手段を自然の聯關の中に求める。精神の創造的な

る力が外界に作り出した變化は屢何と目立たぬものであるであらう、しかし、創造された價値が他者に對しても確とそこに存在するやうになる其の仲介はひとりこの外界の內に安らつてゐる。地球の運動の假說の意見に就いての古人の最も深い思索勞作のある物質的遺留物として、コペルニクスの手中に這入つた僅少の幾葉かの記錄は、今日の宇宙觀に於けるある革命の出發點になつてゐる。

かくの如き論點に緣いて學のかの二類の區劃づけは如何に相對的であるかが洞察され得る。一般言語學の位置に就いて引き起された如き諸の爭論は無效である。自然の研究から精神的なものの研究に移る二つの渡過點に於て、換言すれば自然聯關が精神的なものの發展へ働きかける點と自然聯關が精神的なものから働きかけを受ける、若くは他の精神的なものへの働きかけのための通過點となる他の點に於ては、二類の認識がいつでも錯り合ふ。自然科學の認識が精神科學のそれと錯り合ふ。而して、この聯關あるがゆゑに、自然過程が精神的

生活を制約するかの二重の關係に應じて、自然が形成する働きかけの認識と自然が行動の材料となつてくれる意味での影響の確定の認識とが相纏綿する。かくして音響形成の自然法則の認識から文法及び音樂論の重要なる部分が引き出され、更にまた言語や音樂の天才はこの自然法則に羈束されてゐる、そしてそれ故に天才の諸業績の研究の成否はこの依屬性の理解に制約されてゐる。

更にまたかくの如き論點に緣いて、自然の中に横たはれる而して自然科學から發展せしめられるであらう諸制約の認識は廣い範圍に於て精神的事實の研究に對する基礎となることが洞察され得る。個個の人間の發展もさうであるが、人類の地球全體への傳播と歴史に於ける人類の運命の形成（ゲシユタルトウング）もまた宇宙的全聯關によつて制約されてゐる。例へば戰爭はすべての歴史の主要成素となる、といふのは歴史は政治史としては國家の意志を問題とせねばならないから、然るに、國家の意志は武裝をもつて現はれ武器をもつて遂行される。戰爭の理論

は、爭はんとする意志に對して根據と手段を呈供する物理的なものの認識に、何よりも第一に依據してゐる。何故なれば戰爭は敵に吾吾の意志を强いようとする目的を物理的暴力の手段をもつて遂行するから。このことは以下のことを含んでゐる、戰線に於ける相手が戰爭と名づけられる暴力行爲の理論的目的たる無防備狀態にまで追ひつめられ、しかもそこでは相手の狀勢が戰爭の目的から要求せられる犧牲よりも不利であり、而してより不利なる狀勢とのみ取替へ得られるほどに至るまでに驅られるといふこと。だから、この如き大いなる計算に於ては、科學にとつて最も重要なる、大抵の科學がたづさはるところの數字が物理的條件及び手段である、この場合心的因素については多く言ふべきことはないほどである。

處が、人間、社會、及び歴史の科學は確かに自然の科學を自らの基礎として有つてゐる、精神-物理的統一そのものは生物學の助けをもつてのみ研究され得

る限り、尙またかかる統一の發展と目的活動がそれを俟つてはじめて成立ち得る仲介物、從つてこの目的活動が大部分それが征服に倚りかかつてゐる仲介物は自然に外ならない限り、かく言ひ得るのである。この第一の顧慮に於ては有機體の諸科學がかの科學の基礎となり、第二の顧慮に於ては主として無機體の科學がかの科學の基礎となる。處がかやうに解明される聯關は、一方ではこの自然諸制約が地球面に於ける精神的生活の發展と分布を規定するといふ點に、他方では人間の目的活動は自然の法則に結ばれてゐ而してそれ故自然法則を認識しこれを利用することに制約されてゐるといふ點に存してゐる。故に前者に於ける關繫はただ人間の自然への依屬性を示すに過ぎないが後者に於ける關繫はこの依屬性を地球全體に對する人間の高まりゆく支配の歷史の他の側面としてのみ含んでゐる。前者の關繫の內でも、人間の人間を取卷ける自然に對する關係を含める部分はリッテルから比較方法下に置かれた。その犀利なる洞察は、

殊に彼が地球の輪廓の飾成（グリーデルンク）に依つて地球部面を比較法的に算出するが如き、地球全體の空間關係の內に定められてゐる宇宙史の宿命を豫覺せしめる。その後起つた諸の研究は、リッテルにあつては世界史の目的論として考へられ、バックルからは自然主義のお役に立てられた直觀を、確認しなかつた、さうでなくて、人間の自然制約への一樣的依屬のかくの如き見解でなくもつと思慮のある見解、卽ち歷史的諸民族に於ける精神的（ガイスティッヒ）—道德的（ジットリッヒ）なる諸力の死せる空間性の制約との戰ひが、沒歷史的民族の場合のとは違つて、依屬の關繫を絕えず減少せしめて來たといふ見解が出て來る。かくして此處にもまた自然制約を說明に取入れる歷史的—社會的實在の學が强く現はれて來た。しかし、他の關繫が、制約への順應によつて與へられてゐる依屬性と學的思想及び技術による空間性の征服とが結ばれて、歷史に於ける人類（メンシュハイト）は從屬によつて却つて支配を獲得せることを示す。「何となれば自然は、これに從屬することなくしては、征服せら

れないから。」(Natura enim non nisi parendo vincitur.)[12]

精神諸科學の自然認識に對する關繫の問題は、吾吾がそこから出發したあの對立、すなはち自然は意識の諸制約の下に立つと考へる先驗的立場と、精神的なものの發展は自然全體の諸制約下に立つと考へる客觀的に經驗的なる立場、この二つの立場の對立がなくされる時にはじめて解決されたものと言へる。この課題は認識問題の一面を構成する。若し人人がこの問題を精神科學のためにのみ孤立せしめるならば、すべてに對して確證力のある解決が不可能ではないやうに見える。この解決の條件は、內的經驗の客觀的實在性の擧證といふことであらう、それはまた外界の實存の確めであらう、然るとき精神的事實と精神的存在物は吾吾の內的のものの外界への轉移の過程に倚りてこの外界の中に確と實際に存在する。宛も太陽を視つめてゐて眩んだ眼が太陽の像を種種なる色で、空間の種種なる點に於て繰り返へすやうに、吾吾の把握は吾吾の內的

生命の像を色色に多樣化し、そして吾吾を取圍める自然全體の種種なる位置に緣つて樣樣なる變化を加へてこれを複製する、しかし、この過程は論理的には、ひとり吾吾に原本的に直接的に與へられたるこの內的生命から、これと連鎖せる表出 (Äusserungen) の紹介によつて、外界の類緣せる諸現象に應對的に類緣せるもの (ein verwandten Erscheinungen der Aussenwelt entsprechend Verwandtes). またはかかる諸現象の根柢に存するものへの類推と考へられるしまたそれで正當に成立つのである。たとひ自然自體は何ものであらうとも、精神的なものの諸原因の研究は、さういふ諸原因の現象はいつでも實在的なものの記號として尙またかかる諸原因の共在と持續に於ける同形性は實在的なものの中にある同形性の記號と解せられ利用され得るといふ解釋、この解釋によつて充足せられる。しかし精神の世界の中に這入りそして自然を探究することが出來るのは自然が精神の內容であり、自然が目的として或は手段として意志の

中に織り込まれてあるがためである、精神にとつては自然は自然が精神の中にあるといふことを措いて他にない、そして自然がそれ自身で何であらうとここには全く無關係のことである。精神は行動するにあたつて自然が精神に與へられてあるやうに自然の法則性を信賴し、自然の定在の美しい假象を享樂し得る、かく解釋して何の支障もないのである。

註〔1〕 Baconis aphorismi de interpretatione naturae et regno hominis. Aph. 3.

四　精神諸科學の概觀

精神諸科學に關するこの著作に這入つてゆく人人に、叡智界のこの他半分の範圍の豫備的鳥瞰を與へ、これによつてこの著作の課題を規定することが試みられねばならない。

精神の諸科學はまだ一つの全體として組織せられてゐない、まだある聯關を、すなはちその中で個個の眞理が他の諸眞理や經驗との依屬關係を辿つて秩序づけられ得る、さういふある聯關を示すことが出來ないでゐる。

これらの科學は生命そのものの實際の營みの中に生長し職業教育に促されて發展せしめられた、而してかるが故にこの職業教育に役立つ各學部の體系はこれらの科學の聯關の自然的に成長した形式である。たしかにこれらの科學の最

初の概念と規則とは主として社會的諸機能そのものの遂行に於て見出された。イエーリンクは、どういふ工合に法律的思惟が、法生活（レヒツレーベン）そのものの中で完成せるある意識的精神的勞作（アルバイト）を通じて、羅馬法の根本概念を創造したかを證明した、なほ古代希臘の憲法の分析もまたその中に明瞭な概念と命題とに基づける意識的政治的思惟のある驚異すべき力の沈澱物のあることを示してくれる。個人の自由は政治的權力への參與に根ざせるものである、尤も、この參與は全體に對する個人の作業に準じて國家の制度によりて規律されるといふ根本思想は、始めは政治的技術そのものにとつて、重要なものであつた、その後からソクラテス學派の偉大な理論家によつてただ學的聯關に於て發展させられたまでのことである。それが廣大なる學的理論にまで進行したことは主として支配階級の職業教育の必要といふことにあづかつて力があつた。かくして希臘に於てもソフィストの時代に於けるある高い政治的訓練の課題から修辭學と政治學が起つた、

そして近代諸民族に於ける大抵の精神科學の歴史は同一の根本關係の支配的影響ありしことを示してゐる。羅馬人の公共體（ゲマインヴェーゼン）についての彼らの文書がそれの最も古い節成をかち獲たのは、文書が僧侶階級や特殊市廳の用ひた教示や訓令に於て發展したといふことによつてである。[一] だから、つまり社會の指導器官の職業教育の基礎を含んでゐるさういふ精神の諸科學の體系、並びにかの百科全書に於けるこの體系の表現は、かかる豫備教育のために必要なものを概觀した い要求から起つて來てゐる、そしてこの百科全書の極めて自然の形式は、シュライエルマッヘルガ巧みに神學に緣（お）いて示した如くに、意識してかくの如き目的から聯關を節成するところの形式であらう。斯くの如き制限ある諸の條件の顧慮のもとに、精神諸科學の研究に志す人人は、かかる百科全書風の諸業績に於てこれらの科學の個個の顯著なる集團を見渡すことが出來るであらう。[二]

かくの如き業蹟を歩み越えつつ、歴史的-社會的實在を對象とする諸科學の

全節成を發見しようとする試みは、哲學から起つた。さういふ試みは、形而上學的原理からこの聯關を演繹しようとする限り、すべての形而上學の運命に陷つた。ベーコンはあるもつといい方法を已に用ひた、といふのは彼は既存の精神の諸科學を經驗による實在の認識の問題と關聯させ、さうしてそれらの科學の業蹟と不備とをその課題の上から評價した。コメニウスは彼の汎知識主義(Pansophia)に立つて、諸眞理が教授の場合に當つて必ず取らねばならない段階的順序を、諸眞理の內的相屬の關係から引き出さうと企てた、さうして彼は形式的教育の誤れる概念に反對して將來の教授制度(遺憾のことにもこれは今日もなほ將來である)の根本思想を發見したのであるが、彼は眞理の相屬の原理によつて學のある正當なる節成を準備した。コントは、諸眞理が互ひに關聯し合つてゐるその論理的依屬關係と、諸眞理が現はれる場合の順序の歷史的係合ひとの關係を考察することによつて、彼は諸科學に就いての眞の哲學に對す

る基礎を創つた。彼は歷史的-社會的實在の諸科學の組立てを彼の偉大なる勞作の目的と信じた、そして實際彼の仕事はこの方向に於て强い運動を齎した。ミル、リトレ、ハーバート・スペンサーも其其歷史的-社會的諸科學の聯關を問題とした。[三] これらの研究は、職業的の研究の體系よりも全く別種の鳥瞰を、精神科學に志す人人に供してくれる。これらの研究は精神科學を認識の聯關の中に据ゑる、精神科學の問題をその全範圍に亘つて把へ、さうしてこれが解決を全歷史的-社會的實在を包括する學的組立てに於て試みようとする。併しこれらの實證論者達は、英國人やフランス人の間に今日行はれる無謀の學的建築欲に驅られ、ただ個個の研究に於て多年これに沒頭するがためにのみ湧いて來る歷史的實在の親しい感情を持つでもなくして、特殊科學の結合の原理に適應するやうな彼らの勞作にとつての出發點を見出さなかつた。ほんたうを言へば彼らは、あの巨大な建物、附加されることによりて絕えず擴げられ、內から常に變

化を加へられ、數千年を經て漸次に出來上つた實質的精神科學のあの巨大な建物の建築術の深さを確め、建築計畫に沈潛することによつてこれが理解に努め、さうしてこれらの科學が實際に發展し來つたその多面性を歴史の理性に對する健やかな視力をもつて正しく把へる、實に、かうした用意をもつて着手せねばならなかつたのである。彼らはある假の建築を建てたのである、しかしそれはシェリンクやオーケンの自然に對する無謀な思辨よりももつと耐へられぬものである。而してここにある形而上學的原理から發展した獨逸の、ヘーゲル、シュライエルマッヘル、後期のシェリンクの、精神哲學が實證的哲學者達の研究が成遂げたよりももつと深い視力をもつて、實質的精神科學の收得を有用に用ひるといふことが生じた。

精神科學の領域に於けるある廣大なる節成のもつと他の試みが、獨逸に於て國家學の課題の考察に深く入り込むことより起つた、但したしかにかくして起

つた試みは見地の狹隘を免れてはゐない。〔四〕

精神科學は自然認識の節成に比せられるが如き論理的組立ての一全體を構成しない。この科學の聯關はもつと違つた發展の仕方をとつた、だからこれからはこの科學が歴史的に成長して來たやうに考察されねばならない。

註〔一〕Mommsen, Röm. Staatsrecht 1, 3 ff.

〔二〕精神科學の特殊領域に對するかくの如き傾向の概觀の目的のためのものとして、次の如き百科全書が參照さるることができる。Mohl, Enzyklopädie der Staatswissenschaften. Tübingen 1859. Zweite umgearbeitete Aufl. 1872 (dritte 1881 Titelaufl.). 同じくモールの「國家學の歴史及び文獻」(第一卷、一一一—一六四頁)に於ける「諸多の百科全書の概觀及び評價」をも參照。Warnkönig, Juristische Enzyklopädie oder organische Darstellung der Rechtswissenschaft. 1853. Schleiermacher, Kurze Darstellung des theologischen Studium. Zuerst Berlin 1810. Zweite umgearbeitete Ausg. 1830. Böckh, Enzyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften, herausgegeben von Bratuschek.

1877.

〔三〕 精神諸科學の問題の、それに於てそれら諸科學が相互に關連せる、從つてそれに於て問題の解決がいつでも誘致せしめられるところの內的聯關よりせる、ある概觀が、次の如き著作の中に企てられてゐるのを人人は見出す、Auguste Comte, Cours de philosophie positive (1830—1842)(第四卷より第六卷まで)。その立脚地に變動を來たしてゐるコントの其後の著作は、かかる目的に副ふことはできない。諸科學の體系の、これに對峙せる甚だ有意義なる企畫は、ハーバート・スペンサーのそれである。スペンサーに於けるコントに對する最初の攻擊 (Essays, first series, 1858) に續いて一八六四年に精細なる叙術が The classification of the sciences となつて出た (リトレに於けるコント辯明たる Auguste Comte et la philosophie positive 參照)。さて、彼の A system of synthetic philosophy は、精神諸科學の節成の詳細な叙述を與へるものである。その中 Principles of psychology が一八五五年に最初に現はれた、Principles of sociology は一八七六年よりはじまつて出てゐる (これは Descriptive sociology に關係せるものである。)「體系」の終結の部分たる Principles of ethics (これについては彼自身がかう言つてゐる、この書に先立てるすべてはこの書のただ基礎と

なるべきものであると考へる、と) はその第一卷 (一八七九年) に於て「倫理學の事實」を取扱つてゐる。社會的-歷史的實在の理說のある組成のこの如き試みとならんで、その他にジョジ・スチュアート・ミルのそれが留意さるべきである。それの試みは、精神諸科學若くは道德的諸科學の論理學に就いて論ずるところの論理學の第六章の中に含まれてゐる、尙またそれの Auguste Comte and Positivism (1865) の中にも含まれてゐる。

〔四〕 その出發點となつたものは社會の概念及び社會科學の課題に就いての論爭であつた、卽ちこの論爭に於て國家學のある償ひが探索されたのである。直接の刺戟となつたものはエル・シュタインの Der Sozialismus und Kommunismus des heutigen Frankreich (2. Aufl. 1848) 及びエル・モール (テュービンゲン國家學雜誌、一八五一年) である。モールの說は、彼の「國家學の歷史及び文獻」第一卷 (一八五五年) 六七及び次頁に於ける「國家學と社會科學」に繼續されてゐる。吾吾は二つの節成の試みをここに特に注意すべきものとして擧げる、それは Stein, System der Staatswissenschaft (1852) 及び Schäffle, Bau und Leben des sozialen Körpers (1875 ff.) である。

五　精神諸科學の材料

この諸科學の材料を構成するものは、歴史的知識（クンデ）として人類（メンシュハイト）の意識に於て保有され來り、現代の情勢にまで及べる社會的知識として科學の内に入り得るものとされてゐる限りの歴史的―社會的實在である。かくもこの材料は大層測り知られぬほどのものであるが、而もそれの不完全性はあまりに明白である。科學が必要とするところのものには決して相應しない諸の關心、さういふ必要とは何らの關係をも持たない傳承の諸の制約が吾吾の歴史的知識の成立ちを規定した。陣營の篝火の邊りに集つて同族のものらや、戰ひの同じ仲間のものらが、彼らの英雄の勳功や彼らの種族の遠く神につながれる其の起りについて語り合ふた時代から、相共に生活した者らの強い關心は普通の人間生活の混沌た

る流れの中から事實（タートザッヘ）を擧揚し、守立てて來た。後代の關心と歴史の攝理が、何がこれらの事實の中で吾吾に傳へらるべきかに對して、決定を下した。叙述の自由な一方法（クンスト）としての歴史記述がこの測り難い全體の中で何か或る立場から關心に値するやうに見える個個の部分を綜括する。尚もう一つ、今日の社會は言はば過去の幾多の積層と廢墟を土臺にして生きてゐる。言語や迷信、道德や法律、其外また方面を異にして、記述を超えたる諸種の物質的變化、これらの中に於ける文化業蹟（クルトウールアルベイト）の沈澱物は、評價し難き仕方でもつて記述を支持してゐるところのある傳統を含んでゐる。これが存續に對してもまた歴史的攝理の手が決定を下した。凡そ、科學の要求に合する材料の成立はただ二つの點に緣つてでき上る。近世ヨーロッパに於ける精神的運動の過程は、この過程の諸成素たる文献の中に、充分なる完成さをもつて保たれてゐる。それから、統計學の諸研究が、そこでこれらの研究が適用されたところの國國の狹い期間や狹い範圍

に對して、それらから綜括されたる社會の事實への數量的に確定された洞察を許した、すなはち統計學の諸研究は社會の現在の情勢についての知識に正確なる基礎を與へることを可能にする。

かくの如き測定し難き材料の聯關に於けるかかる非直觀性（ウンアンシャウリウヒカイト）がかの缺陷性に加はる、否それをいよいよ高めることに少からずあづかつた。人間の精神は驚異に導かれて先づ靑空に注意を向けた。見渡される地面の上に靜かに安らつてゐるやうに見える穹窿（ゲエルブンク）、人間とたえず到るところ交渉する、自分の中に纏りを持つてる空間的のこの全體、これが人間の精神を捕へた。だから宇宙の構造の見當づけ（オリエンテイールンク）が學的研究の出發點であつた。このことはヨーロッパと共に東方の國國に於ても同じことである。さて、精神的事實の統成態（コスモス）となると、それの測り知り難い性質の故に、人の眼には入らないで、ただ研究者の集成の精神にのみ這入つて來た。すなはちかかる統成態（コスモス）は、學者が事實を結合しそして吟

味し確定する場合何かある特殊の部分に於て現はれる、統成態（コスモス）は心情の内奥に打ち立てらる。それ故に傳承の批判的な擇り分け、事實の確定、これらの蒐集が精神科學の最初の包括的な仕事となる。文献學が、歴史の極めて困難で美しい素材、古典的古代に縁りて、典型的技術を作り出した後で、この仕事は或ひは無數の個個の研究に分かれて成し遂げられ或ひはまたもつと廣汎な研究の成素となる。歴史的-社會的實在のこの純粋記述の聯關は、それが地球の物理學に基づく地理學に凭りて精神的なもの及びそれの異別の地球全體に於ける分賦を時間と空間に於て記述することを目的とするものであるやうに、その直觀性をいつも簡明な空間的量、數的比例、時間規定への還元によつて、圖表的叙述の助けによつてのみ受け取り得る。ここに至ると材料の單なる蒐集と擇り分けは材料の思想的加工と節成に漸次移つてゆく。

六　精神諸科學に於ける言ひ表はしの三部類

あるがままの働いてゐるままの精神諸科學は、それの歴史の中で活きて働いた事柄（ザッヘ）の理性に倚つて、（精神諸科學を新たに建てようとする大膽な建築師が描いてゐるやうにでなく）、言ひ表はし（Aussagen）の三つの異れる部類を自らの内に結合してゐる。それらの内第一の部類は、知覺に於て與へられてゐる實在的のものを言ひ表はす、この部類の言ひ表はしは認識の史實的（ヒストーリッシェ）成素を含む。第二の部類の言ひ表はしは、抽象によつて分けられてゐるこの實在の部分内容の同形的關繫を解き明す、この部類の言ひ表はしは認識の理論的成素を構成する。第三の部類の言ひ表はしは、價値判斷を言ひ表はし、規則を規定する、この部類の言ひ表はしの中には精神諸科學の實踐的成素が取り込まれてゐる。事實、

觀想されたるもの、及び價値判斷と規則、命題のこれら三つの部類から精神諸科學は成立する。而して把握に於ける歷史的傾向、抽象的-理論的及び實踐的傾向の間の關係は、共通的根本關係として精神科學に行き亘つてゐる。精神科學に於ては、個立的なるもの、個別的なものの把握は、(それは「すべて規定することは否定することである (omnis determinatio est negatio)」といふスピノザの命題の絶えず行はれる否定であるから) 抽象的同形性の發展と同じやうに終局目的をなしてゐる。意識に於ける發端的根柢から最高の尖頭に至るまで、價値判斷及び規範命令の聯關は初めの二つの部類のそれには依屬してゐない。思惟する意識に於けるこれらの三つの課題相互の關係は認識論的分析 (もつと包括的に言へば、自省) の過程に於てはじめて解き明され得るものである。いつでも實在についての言ひ表はしは、價値判斷及び規範命令と、根柢に於ても別別のものである、だから、原始的に異れる二種の命題が成り立つのである。

そして同時に、精神科學内のこの異種性はそれの中で二重の聯關を成立せしめることになる。精神諸科學は、生長せるままでこれを觀れば、ただ存在するものについての認識とならんで價値判斷及び規範命令の聯關の意識を含む、價値、理想、規則、將來の形成への方針がその中で相結ばれてゐる聯關の意識を含む。ある制度を拒否するある政治學的判斷は、眞僞いづれでもなく、この判斷の向ふところ、目的が評價される限りに於て正當、不正當のいづれかである、これに反して、この制度の他の諸制度に對する關係を吟味する政治學的判斷は眞僞のいづれかである。かういふ洞察が命題、言ひ表はし、判斷の理論に對して重きを置かれるに至つてはじめて、ここに、精神科學の存立を自然科學に倣つて同形性の認識の狹隘に蹂躪せしめ、かくしてこれを毀はしめることなき、この學が生ひ立つてゐるままにこれを把へ、基礎づけてゆくある認識-理論的基礎 (eine erkenntnis-theoretische Grundlage) が生れる。

七　歴史的-社會的實在からの特殊諸科學の分離

精神科學の目的、すなはち歴史的-社會的實在の單一的なもの、個別的なものを攝ゑ、それが形成されるために働ける諸の同形性を認識し、それが形成されてゆく場合の目標と規則を確定することは、思惟の術策に倚つてのみ、すなはち分析と抽象に倚つてのみ達せられる。それによると事實（タートゾシュタント）のある一定の側面が無視されるが併し別のものが發展せしめられるところの抽象的言表は、これらの科學專有の最後の目標ではないがしかし缺くことのできない補助手段である。抽象の働きをする認識作用（エルケンネン）は、この學の他の目的の獨立性を自らの内に溶解せしめることはできないが、併し歴史的認識、理論的認識尚また社會を實

際に指導する規則の展解（エントヴィックルンク）も、この抽象の働きをなす認識作用（エルケンネン）を廢することはできない。歴史派（ヒストーリッシュ）と抽象派（シュール）の爭ひは、抽象派は前者の過誤を、歴史派は後者の過誤を犯すがために起つたものである。あらゆる特殊科學は、歴史的-社會的實在から部分内容をほどき出す術策によつてはじめて成り立つ。歴史ですらも、個個の人間と社會の生命に於ける諸特質の内で、その歴史から叙述さるべき時代の中にあつてすべての他の時代の特質と相等しい特質は、これを度外視する、歴史のまなこは差別を示せるもの、單一的なものに向けられる。個個の歴史記述家が誤るといふことのあり得るのはこの點に關してである、何故といふに彼の史實材料に於ける特質の選擇は實にかくまなこを向けるといふことから出て來るのだから、しかし彼の實際の業蹟と社會的-歴史的實在の全事實（タートゾシュタント）とを比較する者はこのことを承認せざるを得ない。ここに重要なる命題が生ずる、即ち精神のいづれの特殊科學も、ただ相對的に、その他の精神の諸科

學と相關係せることを意識しつつ、社會的-歷史的實在を認識するといふ命題。それ故にこれらの諸科學の節成、これら諸科學の分化に於けるそれの健全な生長は、これらの科學の含む諸眞理の各がそれらの眞理を自分の內に攝してゐる實在の全體と如何なる關係にあるかを洞察すること、並びにそれに倚つてこれらの眞理が、じつさい存在するやうになるところの抽象を絕えず意識すること。なほこれらの眞理にそれの抽象的特性に應じて歸せらるべき限定されたる認識價値を絕えず意識すること、これらの事柄と緊密に結びついてゐる。

さて精神の個個の科學が、それに倚つて自らの廣大なる對象を征服しやうと試みて來たところの抵礎的な諸の分解は如何なるものであるかがかくして表象され得るのである。

八　この實在の要素としての個個の人間の諸科學

分析は、諸の生命統一、諸の精神物理的個體の中に、それでもつて社會と歷史とが組立てられてゐる諸要素を見出す、而してこれらの生命統一の研究は、精神の科學の最も抵礎的集團(グルッペ)を構成する。思ふに自然科學には、種種なる大きさの諸物體の感覺現象(ジンネンシャイン)が、卽ち空間の中にあつて運動し、擴大し增大し、收縮し減少する、尙またそこには性狀の變化も起るさういふ種種なる大きさの物體の感覺現象が、研究の出發點として與へられてゐる。自然科學は材料の構造に對する一層正しい見解へとただ漸次に近づいたのであつた。この點では歷史的社會的實在と知力との間の關係はずつと好都合である。卽力に對して、社會

といふ錯綜せる形體(ゲビルト)の中の要素であるべき統一が、實在そのものの内に直接に與へられてゐる、しかるに自然科學となると、此の要素は推理して得られねばならない。思惟が、其の不可避の法則に從つて、すべての認識作用を成り立たしめてゐるかの述語化(プレディチールンク)を、それへ結び附けるところの主體は、自然科學にあつては外的實在が分碎され、事物が打ち毀され、切れ切れに裂かれることによつてはじめて假定的に獲得さるに至る要素である、しかるにこれが精神科學となると、内的經驗の中に事實として與へられてゐる實在的諸統一である。自然科學が、材料を組み立てるのは、如何にしても獨立に實存し得ないでただ分子(モレキユーレ)の成素としてのみ考へ得られる小單元素よりするのである、ところが、歴史と社會の驚くほどに絡み縺れ合つてゐる全體の中で互ひに作用し合つてゐる諸統一は諸の個體、諸の精神-物理的全態である、それのどの一つもあらゆる他のものから區別されてゐ、それのいづれもが一つの世界である。しかるに凡そ世界

は、かかる個體の表象に於てでなかつたら何處にも存在しない。精神-物理的個體のこの不可測性、これに比すれば自然の不可測性の如きは畢竟この中に攝しられてゐるに過ぎないが、かかる不可測性は表象世界(フオルシユテツルンクスヴエルト)なるものの分析に緣つて明瞭になる、といふは其表象世界の中では諸の感覺と諸の表象に資(もと)づいてある特殊直觀が組み立てられ、この特殊直觀は、如何なる多くの豊かな要素から成立してゐやうとも、一つの要素として諸の表象の意識的な結合と分離の中へ這入つて來るところのものであるから。さて、かかる個個のあらゆる個體、即ち測り難き精神的統成態(コスモス)の何處か或一點に位置して作用する此の個體の單獨性(ザングラリテート)は「個體は說き明し難い」(individuum est ineffabile)といふ命題に從つてそれの個個の成素に亘つて考察し得られる、かくすることによつてはじめてその單獨性の全體の意義が認識される。

この精神-物理的諸統一の理論は人間學(アントロポロギー)及び心理學である。これらの學の材

料となるものは歴史と生命經驗のすべてである、而してまさしく心的集團（マッセンベヴエーグ）運動（ムーブメント）の研究から出る結論はこれらの學に於ては、たえず成長するある意味を齎すであらう。精神科學一般の素材を構成する事實の豊かさを殘らず有用に用ひることは、これからやがて說明されるであらうところの理論並びに歴史とを具へた眞の心理學にはなくてはならぬことである。しかるときにはじめて次のことが確言される、心理學の對象を構成する心的諸統一を外にしては、吾吾の經驗に對しては一般に如何なる精神的事實も存在しないと。ところが心理學は、精神科學の對象たる若くは（同じことであるが）經驗が心的統一に緣つて把握せしめる事實を悉く包含してはゐないから、そこで心理學は、あらゆる特殊個體の中に現出するところのもののただ部分內容のみを對象とするといふことになる。それ故に心理學は、ただ抽象によつてのみ歴史的-社會的實在の學の全域から分けられることができるので、これとの聯關がたえず保たれてはじめて發

展し得るのである。もとより精神-物理的統一はそれ自身でよく完結せるものである、何故といふにこの統一にとつて目的であり得るものはそれ自身の意志に於て措定されたもののみであり、それにとつて價値あるものは、それの感情に於て與へられてあるもののみであり、それにとつて事實であるものは、それの意識によつて確實自明のものとして確められたもののみであるから。しかし、かやうに完結せる、しかもそれの統一の自己意識に於て確呼たるこの全態は、他方に於ては社會的實在の聯關の內にあつてのみ顯はれる、それの組織（オルガニザチオーン）はそれが外からの働きかけ（インプルス）を受け入れさうして外へ働き返すものたることを明らかにしてゐる、それの全內容性は歴史及び社會に於ける精神の包括的內容性の眞中にあつて暫有的に現はれ來るただ個個の形體（ゲシユタルト）である、實に此の全態の本質の最高の特質（ツーク）は、それあつてはじめてこの全態がそれ自らにあらざる或ものの中で生活するを得るところのものである。さて、かるが故に心理學の對

象はいつでも、歴史的—社會的實在の活ける聯關から離されてゐる個體に過ぎない、そして心理學は、この聯關の中に於ける心的個在（プシヒッシエ・インツエルヴェーゼン）を發展させてゐる一般的性質を、抽象のある過程によつて、確定することを課題とする。がしかし、社會に於ける相互影響といふことを度外視して謂はば社會の以前に存在する人間、かかる人間は心理學はこれを經驗に於て見出すこともできなければ考へ出すこともできないのである、もしも假にさういふことがあり得ることとすれば、精神科學の組上げは遙かに單純に作り上げられたでもあつたらう。吾吾が眞箇生けるままの人間そのものに歸せしめがちな漠然と言ひ表はされ得てゐるが如き根本的諸特質の極めて狹い範圍のものですらも、執拗に衝突し合へる假說の相讓らぬ論爭下にあるではないか。

それ故に、精神科學の組上げの礎壁の中に假說を入れ込むことによつて、この組上げを不安定ならしめる如きある遣り方はここに直ちに斥けらるべきであ

る。諸の個體統一の社會に對する關繫（ツエルヘルトニス）は、これまで相反する二つの假說に立つて論ぜられてそれぞれ思想の構成に影響してゐる。ソフィストの自然法（ナトゥールレヒト）に對して國家を大仕掛の人間と見るプラトーンの解釋が現はれて以來この兩說は、アトム說的理論と力學的理論との如くに、社會の構造に關して相爭つてゐる。勿論この兩說はそれらが發展されてゆく內に相接近する、がしかしこの對立の消失は、それを引起さしめた根元となれる方法が棄てられたときに、尙また社會的實在の個個の學は一つの包括的な分析的手續（フエルフアーレン）の部分と解せられ、個個の眞理はこの實在の部分內容に對する言ひ表はしと解せられるときにはじめて可能である。探究のこの分析的進行を取ると、心理學は、先の兩假說の前者から出て來るやうに、社會の歷史的柱幹から引き離された個體の初原因的仕掛（アウスシユタツトウンク）の叙述としては發展せしめられ得ない。例へば、意志の根原的諸關繫（グルントラエルヘルトニツセ）はその作用の働き場を個體の中に持つが、しかし說明根據をその中に有しては

ゐない。個體のかやうな孤立的引き離し、尙また、社會の構成の方法としての、個體の機械的組合せは古い自然法學派の根本缺陷であつた。この傾向の偏見は、これと反對の偏見からいつもたえず戰ひを挑まれて來た。この偏見は、社會の機械的組合せとは反對に、社會（ゲゼルシヤフトリツヘル・ケルペル）體の統一といふことを言ひ、そしてもつて實情（ダートマシユタント）の他の一面を滿足させる諸法式を企畫したのである。かかる法式は、個人の國家に對する關係を、部分が部分に先立てる全體に對する關係に下屬せしめるもので、アリストテレースの國家論の中に見られる、それは國家を描いて、良く統制されたる動物的有機體とする見解を徹底せしめたもので、中世の國家學者達に於て見られる、そして現代に於ても著名な著作家達から擁護され精細な研究をうけてゐるところのものである、尙言ひ換へれば、それは國民の魂若くは國民精神（フオルクスガイスト）の概念である。しかし、社會に於ける個體の統一を一つの概念下に屬せしめようとする此の試みは、ただ歷史的對立によつてそれも

一時的理由を有するに過ぎない。國民の魂（フオルクスゼーレ）には吾吾が魂（ゼーレ）の概念でもつて言ひ表はしてゐる自己意識と働きかけ（ダス・ヴイルケン）の統一が缺けてゐる。有機體の概念は與へられた問題を他の問題に置き換へる、そしてしかも既にジョン・スチュアート・ミルが認めたやうに恐らく社會の問題の解決が動物的有機體の問題のそれよりもより早くより完全に成功するであらう。しかしこのことがすでに、相互に制約し合ふ諸機能が相寄り合つて一つの全作業を作りあげてゐるかかる二つの體系の違ひ目を示すことができる。心的諸統一の社會への關係はそれ故に一般に如何なる構成（コンシユトルクチオーン）下にも入れられることが出來ない。一と多、全體と部分の如き諸範疇はある構成に對しては使用することできないものである、たとひ叙述がそれらの範疇を缺くことができないといふ場合でも、次のことは決して忘れられてはならない、かかる範疇は、個體の自己自身についての經驗（エルフアールンク）の内にそれの生ける根源を有してゐるといふこと、だから範疇の逆の適用を試みたところで、

個體それ自身が社會の中に存在するといふ體驗については、經驗自らが語ることのできるよりもより多くは解明されることはできないといふこと。

歷史及び社會に先行する事實としての人間は發生的說明のある虛構である。健全なる分析學が對象とする人間は社會の成素としての個體である。この人間の一般的性質の分析的認識、これは心理學が解かねばならない困難な問題である。

かやうに解すると、人間學と心理學は歷史的生命のすべての認識、ならびに社會の指導と教育のすべての規則の基礎である。これらの學は人間が人間自身の觀察の中へただ深く入り込むといふことではない。歷史記述者と歷史記述者がそれらに資づいて諸の形體（ゲシユタルテン）を活かせて脈搏つ生命たらしめようとするところの史料、この兩者の間にはいつも人間性（メンシエンナトウール）のある類型が介在する、それは政治的思想家とこの思想家がそれの教育の規則を企てようとするところの社會の實

在、この兩者の間に於ても同樣である。科學は、ただこの主觀的類型に正當さと效果の豐かさとを、與へようとするものである。科學は、この個體統一を主語とし、社會と歷史の領解を豐かならしめ得るすべての言ひ表はしを述語とする普遍的命題を發展させようとする。しかし心理學と人間學のこの課題は、課題の範圍のある擴張を、自らの內に持つてゐる。この課題は、精神的生活の同形性の從來の研究を越えて、精神的生活の類型的區別を認識し、藝術家の想像力、實業に從事せる人の自然的素質（Naturell）を、記述及び分析下に持ち來たし、精神的生活の諸形式の研究をそれの過程及び內容の實在性の記述によつて全からしめねばならない。かくしてこそ、社會的-歷史的實在の從來の諸體系にあつて、一方では心理學、他方では美學、倫理學、政治的形體の學、並びに歷史學、この兩者の間に實存した空隙が充たされる、この空隙とは實にこれまで、生命經驗の粗雜な普遍化、性格や運命についての詩人の創造や常識家の

説明、歴史記述家が彼の物語のなかに織り込む漠然とした一般的心理、これらのものによつてうづめられてゐた箇所である。

心理學が、かかる根據づけの科學の課題を解き得るには、事實を確め事實に卽して諸の同一性を確める記述科學の限界内に留まり、そして他方、精神的生命の全聯關をある若干の假定によつて演繹的に明らかにしようとする説明的心理學から自らをはつきりと區別せしめることによつてのみ、成し遂げられる。この如き遣り方によつてはじめて、心理學的諸假説のある確證（フェリフィカチオーン）を經得るところのある捕はれずして自由に確められた精細な材料が、説明的心理學にとつて、手に入ることになる。しかし何よりも、かくしてのみ終に精神の特殊諸科學がそれ自身確乎たるある根據づけをかち得ることになる、といふのは今日心理學の最も有用なる叙述すらも假説の上に假設を築いてゐる狀態にあるのだから。

さて以上の叙述の脈絡のためにここに結着をつけよう。社會的-歴史的實在

の分析がかち獲ることのできる極く簡潔な調書（ベフント）は、心理學の中に示されてゐる、隨つて心理學は精神の特殊諸科學の内で最も初位のそして根元的な科學である、從つてまたこの學の諸眞理は尙進んでなされる組上げの基礎となる。しかしながら、この諸眞理はかの實在から解き離された部分内容のみを含み、而してそれが故にこの實在との關係を前提してゐる。それ故に心理學的科學の他の精神の諸科學及びこれらを部分内容とする實在そのものとの關係は、認識-理論的根據づけに倚つてのみ明らかにされ得る、しかし心理學そのものに對しては、精神諸科學の聯關中のそれの位置からして次の結論が出て來る、心理學は、記述學（デスクリプティーフェ・ヴィッセンシャフト）（根據づけをまつて細かに發展さるべき概念）として説明的科學から、詳しく言へば、それの本性から假説的に精神的生活の事實を簡單な諸假定に服從せしめようと企てる説明的科學から區別されねばならぬといふこと。

個個の精神—物理的生命統一の叙述は傳記である。人類の記憶は隨分多くの個體の生存が關心と保續に價せるを見出した。カーライルは嘗て歴史について言つた、「賢い想起と賢い忘却、ここに一切は成り立つ。」それで以て個體が他の諸個體の直觀と愛とを奪取する其の力から見て、嚴たる一個の人間の存在は他の何かある存在物若くは何かある一般的抽象よりも遙かに強く人の心を把へるものだ。傳記の一般歴史學の内に於ける位置は、歴史的—社會的實在の理論的諸科學の内に於ける人間學の位置に相當する。故に人間學の進歩とそれの根據づけの役目についての成長的認識とは、次の如き洞察を媒介するであらう、一個體生存の全實在の把握、それの歴史的環境に於けるそれの博物誌は、歴史記述の内のある最高なものであり、ずつと廣汎な資料から形成されるあらゆる歴史的叙述と、課題の深さよりして、同價値であること。傳記に於てはある人間の意志が、彼の經歴と彼の運命に於ける意志が、その品

位が顧慮されつつ自己目的として把握される、そして傳記作者は人間を永遠の相の下に觀る者でなければならない、かういふ瞬間すなはちそこではある人間と神の間に介在するものすべては蓋ひもの、衣服、尚また手段であつて、そして彼「ある人間」が星空に接することは恰も彼「ある人間」が地上のどこかある部分に接すると同じ近さを覺えるやうな瞬間に於て彼「ある人間」自身を感じるやうに、さういふやうに人間を觀る者でなければならない。傳記は概礎的歴史的事實を純粋に、完きを得つつ、それが實在性に於て叙述する。そして次のやうな歴史家、即ち歴史を組み上げるにはかかる生命統一に資づき、階級、社會的結合一般、時代、これらを理解するには類型と類表の概念に依つて近づかうと試み、諸の生命の經歴を相繼がしめるには世紀の概念に依らうとする、さういふ歴史家のみが歴史全體の實在性を把へるであらう、殆ど史實原料から取り來られた死せる抽象には似もつかぬものである。

傳記は、ある眞の實在心理學（レアールプシコロギー）のより進んだ發展に對する最も重要なる輔助手段であるが、他方に於て傳記はこの學の現在の狀態の中に自らの基礎を有してゐる。傳記作者の眞の遣り方は、生命統一及びそれの發展とそれの運命とを活かし理解しようとする問題に人間學及び心理學の科學を適用することにあると見ることが出來る。

各人格の處世上の諸規則は、すべての時代に於て文學のあるかなり廣い部門を形作る、すべての文學の內最も美しく且つ深い典籍の中のいくつかのものはこの對象に捧げられてゐる。しかし、もしそれらの規則が學の特性を具ふべきだとすると、必然かかる努力はその源（もと）を探つて次のやうな自省（ゼルブストベヅンヌンク）に入つてゆく、すなはち生命統一の實在についての吾吾の認識と、吾吾の意志吾吾の感

情が生命の內に見出すところの諸の價値相互の關係の意識、この兩者の間の聯關に就いての自省。

自然科學と心理學との限界の問題につけて、ここに研究のある領域が分立せられた、その領域といふは、それの最初の加工者から精神物理學（プシコフィジーク）と呼ばれ、次いで優れたる研究家の共働によつて生理學的心理學の計劃にまで擴げられたところのものである。この科學は身體と心靈に就いての形而上學的論爭を顧ることをしないでこの兩者の現象領域間の事實的關係をできる限り精細に確定しようとすることから出發する。考へ得られる限りでの甚だしい抽象に留つてゐるある中性的概念すなはち數學的意義に於ける函數の概念がフェヒネルから根柢に置かれた、そしてかく二つの方向に於て表現され得べきこの存續せる依屬性を確定することがこの科學の目的と定められた。彼の研究の中心點をなすもの

は刺戟と感覺の間の函數關繫(フンクチオーンスフエルヘルトニス)である。しかしこの科學がもし生理學と心理學の間に存する間隙を完全に充たさうとするならば、尙また身體生活と心的生活のすべての接觸點を掴み、そして生物學と心理學の間にできるだけ完全で有效な結合を据ゑやうとするならば、しかるときこの科學は、この關係を全實在の因果的聯關の包括的表象に組み入れるの餘儀なきことを感ずるであらう。處が畢竟かかる生理學的心理學の主なる對象を構成するものは、心的なる事實及び變化の生理的なるそれらへの一面的依據である。かかる心理學は精神的生活の身體的素質への依屬性を展解してゆく、かかる依屬性がどの位の範圍にまで證明されるかその限界をたづねる、がしかる場合、精神的變化から身體變化へ向つてゆく逆の働きもまた表はれてくる。かくの如くにこの科學は精神的生活を追及する、卽ち感覺器官の生理學的作業と感覺及び知覺の心的過程との間に支配してゐる諸關係から、一方では表象の現出、消失及び連結、他方では腦

髓の機能、この兩者の間に支配してゐる諸關係、更には反射機構と運動體系及び從つては聲音の成立、言語、規則的運動、この兩者の間に存する諸關係へと追究する。

九　歴史的—社會的實在の聯關に對する認識作用の地位

個個の精神—物理的統一の上述の分析と歴史的—社會的實在の全體を對象とする分析とは別のものである。フランス人と英國人はこの全體の理論を展解してゆく全體科學（ゲザムトヴィッセンシャフト）の概念を企てそしてこれを社會學（ソチオロギー）と呼んだ。實のところ社會の發展の認識は社會の現在の狀態（スタートウス）の認識から分けて了ふことはできない。二つの部類の事實が一つの聯關を形成してゐる。それに於て社會が存在してゐる其現在の情勢（ツーシュタント）は先の情勢の成果である、そして同時にそれは次に來る情勢の條件である」。今の瞬間に於ける、情勢の確定されたる狀態は次の瞬間にはすでに歴史に屬してゐる。それ故にある與へられた瞬間に於ける社會の狀態を表

示する截斷面圖（ドウルヒシコニット）は、その瞬間を越えるや否や歴史的情勢として觀察さるべきである。從つて社會の概念はこの自ら發展してゆく全體を呼ぶに用ひられ得るのである。[一]

この社會卽ち歴史的—社會的全實在は、吾吾自身の機構（オルガニスムス）よりも、尙またそれの殆ど謎の如き部分、例へば腦髓の如きよりも遙かに錯綜を極め、解き難きありさまをもつて觀察の對象として個體に對立してゐる。社會に於ける生成の流れは、それらによつてこの生成の流れが成立つてゐるところの特殊の個體は、生命の舞臺（シャウプラッツ・デス・レーベンス）に現はれそしてまたそこから去つてゆくけれども、絶ゆることなく前へと流れてゆく。個體は、一つの要素として他の諸要素と交互影響をなしつつ、その流れの中にあるのである。（ヂッヒ・フォルフィンデット）それの中へ個體が生れ出たこの全體を、個體が作り上げたのではない。それらによつて諸の個體が相互に働きかけ合つてゐるところの諸法則については、個體はきはめて僅かなそして漠然と把へら

れた法則のみを知つてゐる。それは個體内に於て、内的知覺に倚つて、その全内實に亘つて意識さるものであり、尙また個體を外にしてこの全體を作り上げたところの諸過程もまた前同樣である。併しその縺れは甚だしく纏綿たるものであり、それらの諸過程が依つてもつて現はれるその自然の條件は實に多樣を極めてゐ、計量や企ての手段は甚だしく局限されてゐる、だから社會のこの構造の認識はとても征服し難いやうに見える多くの困難によつて阻まれてゐる。此處に吾吾が社會に對する態度と自然に對する態度との間の違ひ目が出て來る。社會に於ける實情（ダートペシュタント）は吾吾の内から理解される、吾吾はそれを吾吾の中で、吾吾自身の情勢の知覺に基づいて、或點に至るまで寫し取ることが出來る、そして愛と憎しみをもちつつ、激情的喜悅を抱きつつ、吾吾の情緒のすべての動きを伴ひつつ、吾吾は歷史的世界を直觀的に表象する。自然は吾吾には啞である。（Die Natur ist uns stumm.）ただ吾吾の想像の力のみが自然の上に生命

と信實（インネルリヒカイト）の微光を注ぎかける。何故といふに吾吾が自然と相互影響の關係にゐる物體的諸要素の體系である限り、如何なる迫眞的領得（インネレス・ゲヴァールヴェルデン）もこの相互影響の作用（シュピール）を告げ知らすことはできない。このために自然もまた吾吾にとつて崇高なる靜寂の表現を持つことができる。この表現は、若し社會が吾吾に對して與へるところの精神力（インネレス・レーベン）の變化に富める作用（シュピール）をそれの諸要素に於て識り取るか或はそれらでもつて表象するやうに强ひられたであらう場合には、消えて行く。自然は吾吾には他人である。（Die Natur ist uns fremd.）何故ならば自然は吾吾にはただ外（そと）のものであつて決して内なるものではない。社會は吾吾の世界である。社會に於ける相互影響の作用（シュピール）は吾吾はこれを共に體驗する、吾吾の全本質のすべての力に於てする、それは吾吾が吾吾自身に於て内から、極めて活き活きした緊張（ウンルーエ）をもつて、社會の體系を作り上げてゐる諸情勢と諸の力とを識り取るがためである。社會の情勢の形像（ビルト）は、吾吾はこれをつねに生動する價値判斷

に於て自由に處理せざるを得ぬやうになつてゐる、少くとも意志の決して靜止することなき動力(アントウリーブ)をもつて表象によつて改造せざるを得ないやうになつてゐる。

以上の事柄は社會の研究に、これを自然の研究と徹底的に區別するところのある幾つかの特徴を、刻みつける。社會の領域に於て確定され得る諸齊一性なるものは、把捉の數量、意義及び的確さから見て、空間に於ける諸關係と運動の諸性質の確實なる基礎に基づいて自然に關して設けられる諸法則に、劣ること甚だしいものである。諸天體の運動、吾吾の太陽系のみならず、其の光が數年を經て漸く吾吾の眼に這入る諸の星の運動も、簡明なる重力の法則に從ふものとして示され、而も長い時間に亙つて前以て計定さることができる。社會の諸科學は理解についてのかかる滿足を約束することはできない。ある特殊の心的統一を認識することの困難は、それらの心的諸統一は社會に於て共働するが故

にそれらの大なる異種性と一個獨立性のために、それらの心的諸統一が結合するに當つて受けねばならぬ自然制約の錯綜のために、數多くの時代の繼續によつて生じたる・そして吾吾が今日知つてゐるやうな人間的本然(メンシユリツヘ・ナトウール)から先の時代の情勢を直接に繹(ひ)き出し或は今日の情勢を人間的本然の一般的類型から推定することを許さない諸種の相互影響、この相互影響の全集積のために、愈多樣を極めたものとなる。が併し、すべてこれらのことは、自分を內から體驗し識り得るものたるこの私自らがこの社會的形體の一成素であること、而して他の諸成素も私と同じ種のものであり從つて私にとつていつでもそれらの內奧に於て把握され得るものであること、この事實によつて償はれて餘りある。私は社會の生命を領解する。(Ich verstehe das Leben der Gesellschaft.)。個體は一方に於ては社會の諸種の相互影響に於ける一要素である、この相互影響の種種なる體系の交錯點である、それはこの種種なる體系の働きかけに對しては意識せる

意志轉向と行爲でもつて反應する、しかしそれと同時に個體はこれらのすべてを直觀し探究するところの知能である。吾吾にとつて精神なき動力原因の作用（シュビール）は個體にあつては表象、感情及び動（ベヴェーグリユンデ）原のそれから別物にされる。而してそこに現はれる相互影響の作用（シュビール）に於ける一個獨立性（ジングラリテート）と豐かさは實に無限である。瀧は相接合せる同質の水滴から成り立つてゐるままである、然るに口邊ただ一個の氣息に過ぎざるたつた一つの命題は、全く個別的なる諸統一の中なる動因（モティーフエ）のある作用（シュビール）を通して、ある一世界（アイン・ヴェルトタイル）の活ける全社交態（ゲゼルシヤフトうこか）を撼す、しかくそこに現はれる相互影響、卽ち表象に於て出て來る動因は他のあらゆる種の原因からはるかに異つてゐる。其の餘の判然區別づけるところの諸多の特徵はここに起因する。精神科學の中で働いてゐる把握（ダス・アウフファッセンデ・フェルメーゲン）の力量は全人間（der ganze Mensch）である、精神科學に於ける偉大なる作業は單なる知能力から出て來るのでなくて人格的生命の力强さから出て來る。此の精神的活動は、かかる精

神的世界に於ける一個獨立的なもの事實的なものの全計聯關（Totalzusammenhang）のある認識のその他のあらゆる目的なくも自らよく收斂し且つ滿ち足りて、存在してゐる、而してこの精神的活動にあつては、把握作用に必ず評價、理想、及び規則に於ける實踐的傾向が結びついてゐる。

この如き根本關繫から、社會に對立せる個體にとつて、個體が企てる追考（ナツハデンケン）の二重の着手點が結果として出て來る。個體はこの全體に卽し意識しつつ自らの活動を完成する、精神的世界の聯關に於ける自らの活動の規則を構成し、それの諸制約を探し求める。併し他方にあつては個體は直觀する知能として振舞ふ、そして認識でもつてこの全體を把握しようとする。そこで社會の諸科學は個體がそれ自身の活動とそれの諸制約に對する自覺から出發した、かういふ工合にして、文法學、修辭學、論理學、美學、倫理學、法律學が先づ出來上つた、而して此處に、精神諸科學の聯關中に於けるこれらの科學の、個體の特殊活動

をそれの客觀とするところの分析及び立法（レーゲルゲーブンク）と全社會的體系を對象とするところのそれらのものとの間に占める位置が、不明確な中間を彷ふてゐることの理由が存してゐる。政治學はいつも、少くともその當初には、盛んにこの關心を持つたのであつた、が併しこの關心は政治學の中で已に早く政治的形體に對する概觀の關心と結びついた。さて、かくするうちここに人間的なものへの關心よりして、眞に内から動かされた・自由な、直觀する概瞥の欲求から專ら起れる歴史記述が生れた。然るに社會内に於ける職業の種類が益多樣に分化したことによつて、尙又それのための技術的準備教育が益理論を發展させ且つそれを包含して行つたことによつて、この技術的理論はそれの實用的要求からして次第に深く社會の本質の中に這入り込んで行つた、認識の關心はかかる理論を漸次に、實際諸科學に改造した、かかる諸科學は、それの實用的志圖とならんで歴史的—社會的實在の認識の課題に當つて共共に働いたのである。

社會の特殊諸科學の分立は、だから歴史的—社會的世界の事實の問題を、探究さるべき客觀の方法的分析によつて、解かうと企てた如き理論的理解の小細工によつて成り立つたのではなかつた、さうでなくて生命自らがそれを成し遂げたのである。社會的影響圏の分離なるものが屢起り、そしてこの影響圏が個體の活動が關係した諸事實の整配を生ぜしめたのではあるが、そこにはある理論を生ぜしめる諸制約が働いてゐた。社會のすばらしく大いなる分化過程、これは實に社會の恐ろしく錯綜せる構造の出所なのであるが、この分化過程はそれ自らの中に、社會の・相對的に獨立の形をなせる・あらゆる生活圏がある理論の中に自らの映像を作るに至つた其諸制約と同時にまた諸の必要とを携へてゐた。かくして、それが中では、謂はばすべての機械の内最も有力なるものの中でその機械の齒車、それの輾子の一つ一つがそれ自身の諸性質に從つて作用し而も全體の内にそれの機能を有してゐるところの社會は、終にかくも多樣なる

理論の簇生と入り組み合ひとなつて或程度まで完全に表現されてゐる。

何よりも精神の既成の諸科學内に於ては、それらの特殊理論の相互の關係、及びそれらの理論がただそれの部分内容を個個別別に考察したにすぎないあの歴史的-社會的實在の包括的なる聯關との關係を確定しようとする如何なる要求も働かなかつた。後に而も單獨に精神の哲學、歴史の哲學、社會の哲學がこの空隙の中へ這入つて來たのであつた、而して吾吾はこれらの哲學が、不斷にそして確實に發展してゆく諸科學の存立を、遂に獲得し得るに至らなかつた其理由を示すであらう。さて、かくの如くに實際的なそして完成し上げられた諸科學は、個個別別にそして輕い結合をなして歴史的-社會的實在の大いなる事實の廣大なる背景から浮び出て來る。ある一個の普遍的科學への關係づけによつてではなく、ただこの活ける事實への關係づけとそれの記述的説明とによつてのみ、歴史的-社會的實在の位置が明瞭となる。

註〔一〕コント、スペンサー等の解釋するが如き、社會學（Soziologie）若くは社會科學（Gesellschaftswissenschaft）の概念は、ドイツの國法學者達にあつて社會及び社會學（Gesellschaft und Gesellschaftswissenschaft）が保有し來れる概念とは區別されなければならない。といふのはドイツの國法學者は、ある與へられたる時代の情勢に於て社會と國家とを區別するのであるから、それも國家の前提條件と基礎を構成するところの共同生活の外的體制をかく呼ばうとする要求から出てゐるのであるから。

十　人類並びに個個の民族の自然的節成の學的研究

きはめて廣い理解に於て歴史及び社會的知識（ゲシヒツ・ウント・ゲゼルシヤフツクンデ）として呼ばれ得るこの記述的叙述は、精神的世界の複合せる諸事實を、それの聯關に於て包括してゐる、すなはち歴史記述の技術（クンスト）と現代の統計學に於て把捉されてゐるやうな聯關に於て包括してゐる。吾吾は先に（五章）職業のとりどりの多様性によつての材料の單なる蒐集と篩ひ分けが漸次に、思惟的加工の絶えざる高まりを俟つて、如何やうにして科學に移りゆくかを見た。この聯關に於ける歴史記述の位置、すなはち事實の蒐集とこれらの事實から同種なるものをある特殊の理論に於て擇出することとの間に於けるこれが位置は、それの獨立的意義に於て顯著となるに

至つた。歴史記述は吾吾にはある藝術的技能（クンスト）であつた、何故ならこれにあつては、藝術家自身の想像（ファンタツー）に於けるやうに、普遍が特殊の中に直觀されるのであるから、普遍が抽象によつて特殊から引き分けられそしてそのままで表現されるのではないから、そしてこの後者は理論に於てはじめて起り得ることであるのだから。歴史記述にあつては特殊は歴史記述家の精神に於ける理念からのみ滿足せられ形成される、そしてそこに普遍化（ゲネラリザチオーン）が出て來るや、普遍化はただ閃光の如くその事實を明るく照らすのである、そして一瞬間抽象的思惟を釋放する。かく普遍化は詩人にもまた役立つ、といふのは普遍化は詩人が描出するところの躁暴、苦惱、愛欲から一瞬間その聽者の魂を思想の自由の國に高めあげるから。

人類（メンシユヘイト）の多様なる生活の上に行き亙る歴史記述家のこの天才的の見渡しから、同種なもののある初階の記述的整理が今や分立して來る。この整理は當然

個個の人間に就いての人間學に參加する。人間學は一般的人間的類型、心理學的諸統一の生命の一般的法則、これらの法則の中に据ゑられてゐる特殊諸類型の分化、これらを發展せしめた、そこで人種學或は比較人間學はここから更に進んでゆく、この科學の對象を構成するものは、もつと狹い範圍での同種性（イデン）すなはち、それあるが故に全體（ゲザムトハイト）の中で諸の集團が區分づけられそして人類の特殊諸分肢（アインツエルグリーデル）として表はれるところの同種性である、具體的にいへば人類（メンシエンゲシユレヒト）の自然的節成とこれにより尙また地球全體の諸制約の下に生ずるところの・地球表面に於ける精神生活及びそれの異別の分賦である。それ故にこの民族學（フエルケルクンデ）は、家族結合及び血族に基づいて、派生進化（アップシユタンムンク）の程度によつて作られた諸の中心圈に於て、人類は如何樣に自然的に節成せられたかを、換言すればそれぞれの狹い圈內にあつてより近い血族と聯關しつつ如何樣にして新しき共通的徵表が現はれて來たかを研究する。この學は派生進化（アップシユタンムンク）及び種の一なること、最も古き棲（すみ）

場所、人類の年齡と共通的徵表、これらに對する疑問から、個個の種族及びそれの徵表の規定、これらの種族の各が自らの中につかんでゐる諸の集團へと向ふ。地理學に基づいてこの學は地球表面上に於ける精神生活とそれの異別の分賦を說明する。人人は民族棲殖（ベフエルケルンク）の流れがもつとも容易なる滿足の方向を追ひつつ、宛も水網（ヴアッセルネツツ）が土壤の諸條件に適應してゆくやうに、擴大しゆくのを見るであらう。

この種族學的節成には歷史的所業（ダート）と歷史的運命が織り込まれる、かくして諸の民族、ある時代の社會的聯關に於ける文化の生けるそして相對的に獨立せる幾多の中心、尙換言すれば歷史的運轉の携帶者が構成される。勿論民族は種族學的自然聯關の中に物質的（ライブリツヒ）にも認識されていいところの基礎を有してゐる、がしかし近緣（フエルヴアンテ・フエルケル）の民族は驚くべき固定性を維持せる身體的類型の近緣性を示してゐつつも、それら民族の歷史的精神的相貌は民族生活の種種なる領域のすべて

に互れる益微細に派生する異別を示して形成される。

一民族に於けるこの個性的生命統一、これは法律、言語、宗教的精神（インネレ）の如きその民族の生命表示の近縁性に於て相寄つて表明されるが、この生命統一は民族心（ルクスゼーレ）、國民（ナチオーン）、民族精神（フォルクスガイスト）、有機體の如き諸概念によつて神祕的に言表はされる。これらの諸概念は歴史にとつては、生命力の概念の生理學にとつての如くに、使用し得られるものではない。民族、この言表が意味するところのものは、精神科學の方法論的聯關の中で第二級の理論と呼ばれ得る諸研究の助けを得て、分析的にのみ（或限界内で）解明され得るものである。この理論は人間學の諸眞理をそれが前提としてゐる、この理論はそれらの眞理を自然聯關の制約下にある諸の個體の相互影響へ適用する、そしてここに文化の體系及びそれの形成、社會の外的體制及びこれの内なる特殊諸結團（Verbände）これらに就いての科學が生れる。それ自體で云へばこの科學は、個體と錯綜せる歴史の過程との間に、

研究の中に入れらるべき三つの大なる部類の客觀を見出す、「社會の外的體制、それが内にある文化の體系、個個の民族この三者である、これらは不變永續の實情（タートベシュタント）であつてその中民族體（フォルクスガンツェ）の事實は最も複雜にして且つ困難なものである。これら三つはすべて眞の生命のただ部分内容である、それ故にこれらの内のいづれの一つも殘りの他の科學的研究への關係づけなくしては歴史的（ヒストーリッシュ）に把握することも或は理論的に取扱ふこともできない。しかし、特殊民族の事實は、錯綜關繫の次第によつて、他の二つの事實の分析の助けを借るのみで取扱はれた。民族心、民族精神、國民及び國民的文化これらの言表によつて呼ばれるところのものは、何よりもまづ民族生活の種種なる側面、例へば言語、宗教、藝術がそれらの相互影響に於て解せられることによつてのみ直觀的に表象せられ、分析せられ得るのである。これは歴史的-社會的實在の分析に於ける最初の一歩に於て強要されるところのものである。

十一　特殊諸科學の更に二つの部類の區分

歴史と社會の現象を研究するものには、抽象的存在物（ヴェーゼンハイト）がいつでも現はれて來る、藝術、科學、國家、社會、宗教の如きはそれである。これらの存在物は實在的なもの（das Wirkliche）に迫らうとするまなこを遮る、そしてそれ自らは把へられ難い霧の團塊に等しい。かつて實體的なる諸形式、星の精や本精（die Gestirngeister und Essenzen）が研究者の眼とアトムや分子の間に支配してゐる法則との間に介在したやうに、これらの存在物は歴史的-社會的生命の實在、自然全體の諸制約下にある精神-物理的生命諸統一及びそれの自然生來の種族學的節成の相互形響、これらを蔽ひ隱す。私はこの實在を見ることを習ひ覺えたい――空間的形像の直觀の技能の如く長い間かかつて訓練さるべきである

一つの技能――そしてかの霧とまぼろしとを逐ひやりたい。

個體から個體へ、物質的諸過程の仲介を經て、光りのやうに傳はるあの見たところ見失はれさうな微細な諸の影響の測り難い多樣性の中で、一つの影響も、物理的世界に於ける太陽の一つの光線と同じやうに、消えて無くなりはしない。が、しかしこの太陽の光線の諸の影響の進路を辿つてゆくことが誰にできようか？　社會的世界に於て同種の諸の效果（Effekte）が一つに結合するところにのみ事實（タートベシュテンデ）なるものが生れる、これは吾吾にある明瞭な強い言葉を話しかける。これらの事實の中で若干のものは、ある一定の方向に於ける諸の力のある同種なる・がしかし一時的なる緊張から生れ出る、或は歴史及び社會に於て聚結せるかかる緊張力の傾向に於てのみ偉大なる影響を産み出すことのできる有力なるある唯一つの意志力の單一の權力を通じても出て來る。それで歴史の中に革命や戰爭の如き不意の強い激動が突發しそして過ぎ去つてゆく。永續

する影響は、これらの中からただこれらが已に現存せる不變的社會的諸形成物(ゲビルデ)の中に一つの修正(モディフィカチオーン)を齎すことによつてのみ生ずる、そこで狂飈と逼迫(Sturm und Drang)の時代はルソーの強い人格から吾吾の國民生活に於ける聚結せる緊張力に影響した、そして吾吾の詩作(ディヒトウンク)にある別の形態(ゲシュタルト)を與へた。まさにこの種の不變的諸形成物は社會的實在の中に強く現はれてゐる他の事實(タートベシュタント)である、しかし不變的諸形成物は諸の個體の永續的關係から生れ出る、そしてこれがひとりこれまで眞に學的理論的構(ベアルバイトウンク)論を見出したのであつた。

それが、もとを探れば最も深い形而上學的祕義(Geheimnis)に辿られ、そしてそこから性的愛、子の愛情、母なる大地への愛に於て自然力的感情の強い暗い絆(きづな)をもつて吾吾を結合する社會的節成の自然基礎(ナトゥールグルントラーゲ)は、種族的節成と定住(Niederlassung)の根本的係合ひを俟つて大小の集團及びそれらの間の共同社會(ゲマインシャフト)の同種性を生ぜしめるものであることは、已に吾吾の見た如くである、歴史的

生命は、それあるがために殊に個個の民族が研究に對して纏れる諸統一としてあらはれるところの、この同種性を發展させ、さて、同種性を越えてここにこれにつけて永續的形成物、社會的分析の對象が生ずる、この對象の生ずるは人間本性のある成素に基づける從つて永續するところの目的が個個の個體に於ける心的作用(プシヒシエアクト)を相關係せしめかくして一つの目的聯關に結合する場合か、それとも或は永續的原因が働いて數多の意志を一全體をなせる一つの連合に結び合はす場合かである、但しここにいふ原因は自然的節成の中にそれとも又人間本性を動かす目的の中に存してゐやうとそのいづれでもよい、吾吾がこの二樣の場合で前者の場合より生ずる事實(タートベシュタンデ)を把へる限り吾吾は社會に於て文化の體系(die Systeme der Kultur)を區別する、吾吾がこの後者の事實を考察する限りそこに人類(メンシュハイト)が與へた外的體制(die äussere Organisation)が可見的となる、すなはち諸の國家、諸の結團、尙もつと進んで取入れられるならば、數多の意

志の持續的なる諸連合の組織體（ゲフコーゲ）、支配、從屬、所有權、共同社會（Gemeinschaft）等の根本關係よりする組織體、これらは近頃ある狹義の解釋で國家に對して社會として呼ばれて來たものである。

諸個體は歴史的-社會的生命の相互影響をなして活動してゐる、といふのは、諸個體はそれらの生活力の生ける作用（das lebendige Spiel ihrer Energein）に於て諸種の目的のある多種を實現することを求めるから。人間の本性の中に置かれてある要求は、一個の人間なる存在（Menschendasein）の跼蹐のために、個人の孤立せる活動によつては滿足せしめられないで、人間的勞作の分業と諸の時代（ゲネヂチオーネン）の相續に於て滿足せしめられる。このことは人間本性の同種性及びこの目的に仕へ且つ視渡してゆくところの・人間本性の內なる理性とによつて可能である。これらの諸性質から、行動が先行生命（フオルレーベン）の勞作の收得へ順應することが、尙また行動が同時代のものの活動の共働へ順應することが出て來る。

かくて歴史と社會とはすべて是れ人間の本質的生命目的の行き亘れるものである。

さて科學は、すべての認識（エルケンネン）の根柢に存する理由の原理に從つて、人間本性の諸成素に基づけるしかも個體を越えて働くかかる目的聯關內に於て、個體を構成せる個個の心的若くは精神物理的諸要素間に生ずる依屬性並びにそれらの要素の諸性質間に見出される依屬性を確定することを企てる。科學はこの目的聯關の中にあつて如何に一要素が他要素を制約するか一要素の中の一つの性質の現出に如何やうに他の性質のそれが依屬してゐるかを規定する。これらの要素は意識されるが故に、或限度內に於ては言葉でもつて言ひ表はされ得る。それ故にこの聯關が諸命題の一全體によつて描き出される。さりながらこれらの命題は甚だしく種種なる性質を帶びてゐる、目的聯關に於て結合されてゐる心的諸要素が殊更に思惟に若くは感情に若くは意志に屬するか否かに應じてここ

に眞理、感情の表出、規則がそれぞれあらはれてくる。そしてそれら要素の本性のこの相違性からそれらの結合の相違性が出て來る、從つてそれらの間に學が見出す依屬性の相違性が出て來る。この點に於てすでに、すべてこれらの結合を一樣に論理的結合と解し、そしてそれがために終にはすべてこれらの精神的目的活動を理性と思惟に分解しようとすることは抽象派の大いなる過失の一つであつた。私はかかる目的聯關のために體系といふ言葉を撰ばう。

心的或は精神物理的諸要素の目的聯關に關しては上述の如くであるがさて個個の體系內に成立つ依屬性は、何よりも、すべての點に於て同形的に其體系に固有に具つてゐるところの根本關繫に關連して存在する。かかる根本關繫は一つの體系の一般的理論を構成する。この最も一般的なる種類の依屬性をシュライエルマッヘルは、宗教といふ體系內で、宗教的感情の事實と教義學(ドグマティーク)及び哲學的世界觀の事實、この感情の事實と儀禮並びに宗教的聚合性 (religiose Geselligkeit)

の事實との間に見てゐる。テューネンの法則は、市場の遠隔は、それが土地の產出物の利用に影響することによつて、農業(ランドヴィルトシャフト)の進度を支配するその關繫を言ひ表はしてゐる。かかる依屬性は、其體系の分析と、及び其體系に於て結合されたる心的若くは精神物理的諸要素の相互影響の本性並びにこの影響がその中に見出される自然及び社會の諸制約の本性から引き出される結論との共働をまつて、當然見出され叙述される。さて尙又ここに、ある體系の特殊形體(アインツエルゲシュタルト)を構成するところの、其體系の上に示せるが如き一般的諸性質の諸限定の間にもつと狹い範圍の依屬性が生じる。そこで、ある宗教的特殊體系內に於けるある教義はその體系內に一緒にせられてゐる他の教義と獨立してはゐない、實に教義史と教義學の主要課題は、シュライエルマッヘルの試みた宗教の深い分析によつて明瞭なる意識に達した如くに、それに倚つてはただ教說體系のみが出て來るやうな誣ひられたる論理的關繫の代りに、宗教殊にクリスト教の本性の中

に基礎を持てる諸の教義の依屬性の仕方(アルト)をこの二つの學に於て順序づけ説明することに、存するであらう。

ところが文化の諸體系についてのこれらの科學は、心的若くは精神物理的諸內容の上に安らつてゐる、而してこれらの科學に應ずる概念は、個性心理學(インディフィドゥアルプシコロギー)から使用される概念とは種別的に異つてゐてそしてこれらに比較されると精神諸科學の組上げ（Aufbau）の中で第二次の概念として特に呼ばれ得る概念である。何故なれば、ある體系の目的聯關がその上に安らつてゐる人間本性の成素の中に据ゑられてあるが如き內容性は、自然全體の諸制約の下にある諸個體の相互影響を蒙りつつ、歷史的高まりを經るに連れ、複合的諸事實を產み出すから、しかもこの諸事實は心理學にあつて發展せしめられたる基礎的內容性そのものとは異れるものであつて體系の分析の基礎を構成する事實だから。凡そ科學的確實性の概念は、それの種種なる形體に於て卽ち知覺(ヴァールネーメン)に於ける實在の確

證として、思惟(デンケン)に於ける明證として、認識(エルケンネン)に於ける、理由の原理に從へる必然性の意識として、科學の全理論を支配してゐるものである。かくて需要、經濟心、勞働、價値（Bedürfnis, Wirtschaftlichkeit, Arbeit, Wert u. a.）などの精神物理的諸概念は經濟學によつて遂げらるべき分析に對する必然的基礎を構成する。そして概念間に於ける場合の如くに、これらの科學の柢礎的諸命題と人間學の收得知識との間に、（概念と命題を結ぶ關係に應じて）、これらの科學が精神科學の上向的聯關の中で第二次の眞理として呼ばれ得るに至るある關繫が生ずる。

吾吾は精神の特殊諸科學のかくの如き分析が捧げられてあるところの論證の聯關に更に今一つの節成的部分を加へることが出來る。文化の體系を構成する諸事實は、心理學的分析が認識する諸事實を經てのみ研究さることができる。この體系の認識の基礎をなす概念と命題は、心理學が發展せしめる概念と命題

に對してある依屬關繫をなしてゐる。ところがこの關繫は甚だ複雜である、さればこそ認識（エルケンネン）の歷史的—社會的實在への特殊な位置から出發するところの、相聯關して進む認識論的及び論理學的根據づけのみが、精神物理的諸統一の特殊諸科學と經濟、法律、宗教等の特殊諸科學との間に今日まで存してゐる空隙を塡たすことができる。この空隙はあらゆる個個の研究家から感じられる。演繹的と歸納的との論法の單なる關繫をここにも見、從つてそれがためにひたすら論理的方法でそしてこれら二つの論法の效力（トラークヴァイテ）の吟味によつてこの困難な問題を解かうとする英—佛の知識學は、何に於てよりもまづこの點に對する大ざつぱな討議に於てそれの無力さを曝露してゐる。これらの討議の方法論的諸前提は誤つてゐる。疑問のあり箇所は、これらの研究者が示してゐるやうに、かかる科學は、ある演繹的方法をとり次ぎにこれを事實的生命の複合せる諸關繫へ當てて歸納的擧證及び適合如何を見るやうな發展のさせ方を取り得るものであ

るか否かを問ふにあるのでなく或はまた歸納的方法をとり次ぎにある演繹によつて人間本性から確證してゆくべきか否かを問ふにあるのではない。この疑問の出し方そのものが自然科學から抽象的圖式を移し込んだことに基づいてゐる。精神諸科學の特殊の課題の諸制約のもとに立つ認識（エルケンネン）の作業の研究のみがここに存する聯關の問題を解くことができる。

さて、人人は次ぎのやうに描いてゐるかも知れない、まづ生存體（ヴェーゼン）があつてそれらは相互影響をなしてゐ、そしてそれら相互影響は一つ若くは數多の體系の中に於て行はれる心的諸作用のかかる入り組み合ひ（インアイナンデルグライフエン）に於てのみ交り合ふものだと。尚又人人は、かかる生存體のすべての影響力はかかる目的聯關の中に加はり込む（アイングライフエン）能力あるものと考へるであらう、そしてこの能力すなはち彼らの目的活動を一つ若くは數多の體系に適合させるといふことに彼らの相互關繫のすべては盡きてゐると思ふであらう。これらの生存體のいづれも彼の行爲を合目

的的に調へるために彼と相伍してゐる者の行爲に適應させるけれども彼らのいづれもそれ自ら孤立せるものである、ただ知力が彼らの間にある聯關を設定するに過ぎない、彼らは相互に當てにし合つてゐる、しかし彼らの間には共同社會(ゲマインシヤフト)の如何なる活ける感情も存在しない、彼らは、意識をもてるアトムに似て、彼らの間には如何なる束縛も如何なる結び合はせも不用であるほどに正確にそして完全に彼らの目的聯關を保持してゐる、と考へるであらう。

人間はかかる種類の生存體ではない。人間の本性にはもつと外の諸性質が存在してゐる、すなはちこれらの心的アトムの相互影響に於て上述の關係にもつと他の不變的諸關係を加へるところの諸性質である、それらの關係の中最も著しきものは吾吾から國家と呼ばれてゐるところのものである。從つてここに、國家學(シユターツヴイツセンシヤフト)の中にそれの中心點を持つところの社會的生命のもう一つの理論的觀察が存在することになる。社會的生命の激情の不羈の勢力(ゲヴアルト)は、共同社會の

衷心的欲求及び感情と相俟つて、これらの體系の組織態(ゲフユーゲ)に於ける成素であるところの人間を、人類(メンシユハイト)の外的體制に於ける節成的部分となさしめる。吾吾は、心的諸要素のある聯關をある體系の目的全體(Zweckganze)でもつて表示してゐる構造、ならびにある體系に於ける諸關係を穿鑿する分析と、諸の意志統一の結團(Verband)によつて生ずる構造、ならびに社會の外的體制卽ち組合(ゲマインザームカイト)、結團及び支配關係や意志の外的結合より成る組織態、これらの諸性質の分析とを區別する。

相互影響に於ける永續的諸關係のこの後者の形式がその上に立つてゐる基礎は、體系の事實を生み出す基礎と同じ深さに達してゐる。かかる基礎は何よりも、人間をしてある社會生存體たらしめてゐるところの人間の諸性質の中に横たはつてゐる。その中に人間が存續してゐる自然聯關、かくてそこに生れ出る諸同種性、ある人間なる生存體(アイン・メンシエンヴエーゼン)に於ける心的諸作用の他のある人間なる生存體

に於けるそれらへの持續的諸關係、これらには協屬の永續的感情（dauernde Gefühle von Zusammengehörigkeit）が結びついてゐる、それはこれらの諸關繫の單なる冷いある表象（アイン・フォルシュテツレン）にとどまるものではない。力强く働くもつと外の力が諸の意志を强要して結合させてゐる、すなはち利害と强制（Interesse und Zwang）である。これらの二種の力は相並んで働くそれでこれらの力のそれぞれが結團や國家の成立に當つて如何なる分前を持つかといふ最も古くからの論爭問題は一一の場合の歷史的分析によつてのみ解決することができる。

かくて生ずる諸科學の本性と範圍とは文化諸體系及び其れの諸科學の詳述からはじめて愈詳細に判然して來る。吾吾はこの詳述をはじめる前に精神諸科學のこの分析にゆき亘つてゐる論證の聯關に於て尙二つの論結を下さう。

文化の諸科學の諸概念と諸命題は人間學のそれらに對して依屬の關繫を有するがそれと同一の關繫が社會の外的體制の諸科學のこの領域に於てもまた存す

ることは明白である。さて外的體制の諸科學の基礎を構成する第二次の諸事實は、これから後に出て來るある點に卽いて說明するであらう、といふのはこの諸事實は文化の體系の細かい分析の後に初めて十分なる明瞭さをもつて見られ得るものだから。しかし吾吾がこの諸事實を如何やうに規定するやうにならうとも、この諸事實は、かういふ問題を、卽ちその問題の存在はある科學の必須なることを證明してゐる問題を含んでゐる、さてそのある科學とは、人間の認識（エルケントニスプロツエス）作用（ケンネン）の一般的制約を顧慮しつつ歷史的-社會的實在に向けられたる認識過程の形成を吟味し、またそれの限界と手段を、尙又その中では意志がこの領域に於ける人間性（メンシユハイト）についての認識に先行する、ことを强要されてゐるところの諸眞理の聯關、これらを陳述する科學である。學的思惟の聯關に於ける缺陷は、宗教或は經濟の諸科學に對してと同樣、國家學に對して感ぜられるところのものである。

人人が科學のこれらの二つの部類の相互の關繫に着目すると、ここに論理學者に對してある一つの要求、卽ちこれらの科學が成立した其の認識過程の聯關に對する方法的意識に關しての、尙深まりゆく要求が生れる。これら兩部類のそれぞれ一方の科學は、それによつてこれらの科學が分離したところの分解の過程の本性に遵ひつつ、その科學の眞理が他の部類の科學の中に見出されたる眞理と絶えず關係(レラチオーン)をもたされることによつてのみ、發展せしめられる。そしてこれと同じ關繫(フエルヘルトニス)がこの一部類の中のそれぞれの科學の內にあつても存在する、若しさうでなかつたら如何にして審美に就いての科學の諸眞理が道德並びに宗教の諸眞理への關係づけなくして發展せしめられ得よう、何故といふに藝術の起源、理想の事實はこの生ける聯關に戻つて探らるべきことを語つてゐるから。これらの科學にあつても吾吾の認識は分析を試み部分內容を抽象的に發展せしめることによつてかち獲られる、がしかしこの聯關とそれの利用(フエルヴエルトウンク)に

對する意識、實にこれはこの事實(タートベシユタント)から出て來る大いなる方法論的要求である、かやうに謂はば調理して製出された部分內容のその中にこそ生命自身が脈動するかの實在の有機組織(オルガニスムス)への關係が忘却されることがあつてはならない、むしろ認識作用(エルケンネン)は、かかる實在の有機組織への關係からのみ、概念や命題にそれらの精密なる形式を與へそしてそれらに相應しい認識價値を分かち與へることができるのである。抽象的部分內容の活ける全體への關係を閑却しそして終にはかかる抽象性を實在性として取扱ふことは抽象派の根本過失であつた。活ける超理智的に强力なる、そして理由の原理に依れる認識作用(エルケンネン)をはるかに超越せる實在を深く感ずるがために抽象の世界から逃避することは歷史派の、償ふところあるとはいへ、少からず宿命的の過誤であつた。

十二　文化體系の諸科學

社會的生命の諸體系の概念の理解にとつて出發點となるものは、社會の成素としての諸科學の初階の集團の對象たる個個の個體の生命の豐かさである。さて、最初にまづかう想像してみよう、ある與へられたる個體に於けるこの生命の豐かさは他の個體に於けるそれとは全然比較することもできなければそれへ移して見ることもできないものと。然るときにはこれらの個體は物理的の强制力（ゲヴアルト）を通じて相互に征服し合ひ隸屬せしめ合ふであらう、がしかし何ら共通の內容を所有することはないであらう、一つ一つの個體はすべての他の個體に對してそれ自らの內に立籠るであらう。事實あらゆる個體には、そこではその個體の活動がたしかに他の個體のそれと同列にかく配屬せしめられないある點が存在す

るものである。個體の生命充溢の中で、かかる點から制約されてゐるところのものは、社會的生命の如何なる體系の中にも入らない。すべての個體の諸同種性が、それら個體の生命內容の共通性の存在の制約なのである。——次にこれらの個體のそれぞれの中の生命を勿論比較し得られ移し換へ得られるがしかし單一のものでそして分析せられぬものだと想像して見る、然るときは社會の活動は唯一個の體系を構成することにならう。吾吾はかかる根本體系の極く簡單なる性質を明らかにする。かかる體系は、社會に於ける諸個體の相互影響が、人間本性の中にある諸個體に共通な成素に基づいて、人間本性のこの成素が滿足せしめられるやうな諸活動の融（インアイナンデルグライフェン）合を結果せしめる限り、社會に於ける諸個體の上に安らつてゐる。この點でかかる根本體系は、社會が要求するものに對するただ手段の體系のみを包括してゐるあらゆる施設（Veranstaltung）と區別される。さて、諸個體の相互影響といふことに留意して考へるとAなる個體

が彼の働き（Wirkung）をＢＣＤへと及ぼしそして彼らから影響（Einwirkung）を受取るさういふ直接相互影響は、Ｂに於て起つた變化のＲＺへの移續影響（Fortwirkung）に基づくやうな間接相互影響とは區別される。前者の相互影響に倚つては個個の個體の直接相互影響のある視界（ホリツオント）がそこにできる、そしてこの視界はそれら個體にとつては大層夫夫異つたものである。間接的相互影響も社會に於ては相互影響を仲介する外界の諸條件によつて制限されてゐるのみである。社會に於ける諸個體の直接及び間接の相互影響に基づいてゐるかかる體系は必ず增大及び發展（Steigerung und Entwicklung）の性質をもつてゐる。何となれば增大と發展を制約するところの心的生命統一の法則には尙かういふ係合ひ卽ち感覺、感情、表象がＡなる個體からＢへ傳へられるに當つてそれらがＢへ傳はりゆきつつも依然同じ强さをもつてＡの中に保留されるといふそれらの相互影響の相當の根本的關繫があるから。――さてかかる唯一個の體系が存

在するとすれば、これが社會の生命全部を構成することにならう、その體系に於ける傳達の過程及びこれが內容は單一なものとならう。ほんたうには個體の生命の豐かさは諸の知覺と思想、感情、意志作用（アクテ）、これらに分たれてゐる。個體の生命の豐かさに於てその他尙如何なる分離や結合があらうともそれには拘はらず、已にかく分れてゐることそのことによつて、心的生命の自然的節成に倚つて、この生命內容が社會の生命に於ける諸體系のある相違を可能にしてゐる。

これらの體系は、個個の個體そのものは生命の舞臺に現はれそして其處からまた去つてゆくけれども、依然存續する。何となればどの體系も人のある（ペルゾーン）一定の且つ修正を受けつつ繰り返へされる成素に基づいてゐるから。宗教、藝術、法律は、それらがその內にあつて活きてゐるところの諸個體は變移するけれども、不滅である。それぞれの時代（ゲネラチオーン）に於てそれぞれに、人間本性の內容性と豐かさとが、それらが人間本性の成素の內に現存するか若くはそれと連關してゐる限

り、この成素の上に築かれた體系の中に新たに流れ込む。例へば藝術は人間本性の個個の一成素としての想像の能力の上に築かれてゐる、されば藝術の創造（シエフフンゲン）の中には人間本性の全體の豐かさが現はれてゐる。けれどもその體系は、外界が須臾にして滅びゆく諸個體の諸種の影響（アインヴィルクング）を、ずつと永續的なる若くは生産を繰返へすといふ仕方でもつて、保存し仲介する能力を有するといふことによつて、はじめてその充分なる實在性（Realität）、客觀性を享受する。かかる體系の目的に從つて有價値に形成された外界の諸成素と、人格の生ける、がしかしやがて消えさる活動とのこの結合は、個體それ自身には屬しないある外的持續とこれらの體系の實質的客觀性の特性とを創造する。かくしてこれらの體系の各は、人（ペルゾーネン）の本性のある一つの成素に基づき、その成素から多樣に發展せるある活動方法（テーティッヒカイツヴァイゼ）として形成されるのである、この活動方法は社會の全體に亘つて社會のある目的を充足せしめ、そして外界に製出された永續的なる、若くはその

活動と聯關して繰り返へされる、この活動の目的に仕へる手段（ミッテル）を具備してゐる。

個個の個體は進展してゆく文化の過程に於て漸次により精微に種別化してゆく數多の體系のある交錯點である。實にある一個體がもつてゐる同一の生命作用（Lebensakt）はこの多面性を示し得てゐる。一人の學者がある著書をなすや、その過程は學を作り上げる諸眞理の結合に於けるある節成部分（ein Glied）を構成してゐる。同時にその同じ過程が、書籍（エクゼンプラーレ）の製造と販賣といふことから成る經濟的過程の最も重要なる節成部分（グリート）である、更に又それは契約の實行として法律的一面をもつてゐる、而してその過程は行政關係の中に入れ込まれたるその學者の生活機能（ペルーフスフンクチオーン）の一成素でもあり得る。この著書の中の文字が書き下されることとその一つ一つがかくしてすべてこれらの體系の一成素となる。

さて抽象的なる科學は歴史的-社會的實在の中でかやうに織り合はされた諸體系を並列的に取扱ふ。蓋し個人はかかる體系の中に生れながらに入れ込ま

れ、そしてかるが故にかかる體系を、彼の以前にもあり彼の以後にも存續し且つその諸の施設（フェルアンシュタルトゥンゲン）をもつて個個の人間に働きかけるさういふある客觀性として、迎へる。かくしてこれらの諸體系は科學的想像力に對してはそれ自身で存立してゐる客觀性として現はれる。經濟制度や宗教のみならず、科學すらもかやうな客觀性として形を具へたものの如く（bildlich）に吾吾に臨む。吾吾の上に懸る蒼穹、太陽の日日の尙また年年の運動、この運動に卽いての部分的にかくも入組める諸天體運動、これらから、宇宙間の諸の物體の實際の位置、量、運動形式、速力への包括的推理、實にこの推理が今日の人間にとつては客觀的事實（タートベシュタント）、自然科學のもつと廣大なる事實の部分として、この推理がそれに於て完成される人（Person）から全く引き離されて、宇宙の節制部分となつて嚴存してゐる、個人がそれに對するや個人がある精神的實在に對すると少しも變らないある事實（タートベシュタント）である。

かくの如くこれらの體系は並列的に取扱はれて分析下に齎されるが故に、さういふ研究は歷史的—社會的世界の內なる諸の共同體及び結團（Gemeinsamkeiten und Verbände）を對象とせる他の部類の研究と絕えず關係が保たれてのみ計畫し得られる。この關係が顧慮されるやこれらの諸科學の內部構造（Konstitution）にとつて終始重要なる個個の體系間の區別が明瞭になつて來る。

これら諸體系のいづれも歷史的—社會的實在の全體の內にあつて發展する。何故なれば各體系は人間の本性のある成素の所產、なほ詳しく言へばかかる成素の中に根をもてる社會的生命の目的聯關によつて細かに規定されたるある活動の所產だから。たとひ各體系は、あるより高い文化階梯を俟つてはじめて、分化せる且つ內實的（インネルリッヒ）に豐かなる展開に達するものだとしても、各體系はすべての時代の社會に共通せる基礎のなかに置かれてある。さて、程度の强弱はあれこれらの體系は社會の外的體制と相關係してゐる、而してこの關繫は社會の外

的體制の形式を制約する。社會の實際的行動がその中へ分解されてゐるが如き體系の研究に至つては政治的形體の研究から離されることはできない、何故なら政治的形態の意志はそれに下屬せる個體のすべての外的行爲に強く影響するものだから。

一　文化の諸體系と社會の外的體制との間に存する諸關係。法律

前章は文化の諸體系と社會の外的體制との區別を陳述することに充てられた。今現に讀者によつて辿られつつある章、卽ち文化の體系の諸學について論述せるこの章は何よりも先の區分の陳述に基づいて文化のある體系の概念を發展させた。吾吾は今や文化の諸體系と社會の外的體制の區別の理解から兩者の間に存する諸關係の理解に移らう。

ゲーテは、彼の自然科學的考察法が歷史的世界の分析にまで進むを得てはじめてある世界觀に成長したあの圓熟期に於て彼の友人カルル・アウグストの死後、ドルンブルクの隱遁（千八百二十八年七月）に起因して、歷史的世界についての彼の見解を次のやうに言表はしてゐる。彼は城や城を取卷ける界隈へ先づ眼注ぐことから出發する。彼には「理性的なる世界は時代から時代へとある一貫的行爲を判然と目指してゐる」（Die vernunftige Welt sei von Geschlecht zu Geschlecht auf ein folg rechtes Tun entschieden angewiesen.）といふ抽象的眞理に對する直觀像が生れる。ここから結果してくる社會的-歷史的實在の見解を彼はある哲人の調子の高い言葉でもつて約言する、「理性的なる世界は、絕えず止むことなく必然的なものを惹起せしめ、のみならずこれにより自らを偶然的なものの支配者にまで高めるところの偉大なる不滅の個體と觀らるべきである。」この命題は、一つの法式に於けるが如くに、歷史的-社會的

實在とそれの諸科學に對する先に試みられた概瞥が、社會的-歴史的實在の諸要素としての個體から出發する漸進的分析の途をとつて、かち獲たそしてまたかち獲るであらうところのものを、包含してゐる。個體的の相互影響は偶然的な且つ何の聯關もないものの如くに見える、だから生命の舞臺の前景に展開されてゐる生や死、運命の全偶然性、激情や局限されてゐるエゴイズム、すべてこれらのものは、社會の生命に於てただ偶然事の影響の下にある諸個體の諸の關心の意味もなき動と反動（Spiel und Widerspiel）だと看取するにとどまる人間學者（メンシエンケンネル）の見解、歴史の過程といへば人の力（persönliche Kräfte）の意味もない動きとより外は解しない實際主義歴史家（プラグマティツシエル・ヒストリケル）の見解を、確證してくれるやうに見える。併し、ほんたうには個個の個體のかの相互影響、彼らの激情、彼らの虚榮、彼らの關心によつてこそ人類（メンシヨハイト）の歴史の必然的目的聯關は實現される。實際主義的歴史家とヘーゲルとは相互に何の理解も持たない、何となれば彼らは

宛もこのしつかりした大地から高い天空に向つての如くに語り合つてゐるのだから。がしかし兩者のいづれも眞理の半面はこれを所有してゐる。何となればかういふ譯だから、歴史的-社會的實在にあつて人間によつて惹起されるものはすべて意志の發條（シユプルンクフエーデル）に倚つて起つてゐる、この發條に於ては目的が動機として働いてゐる。動機は意志に備つてゐる性情（ベシヤツフエンハイト）である、動機は、諸の意志にゆき亘つてゐる目的聯關がそれに基づいて安らつてゐるものを如何なる法式で把へやうとそれには拘はらず、意志の中にあつて普遍妥當的なものであり且つ個個の生命を超えたるものである。ただ自分自身のことにのみ關つてゐる・とは云へかくならざるを得ないところの・人間の日常の營みは此の聯關を俟つてはじめて遂行せられる。而してこの目的聯關に意味をもつて挿入され（einordnen）得ざるものであつたら、たとひ人間の内の勇士達の所業ですら歴史はこれを沒却して跡なきものたらしめる。しかしこの偉大なる目的聯關は先づも

つて二つの手段を處理する。その一つは種種なる諸個體の個個の行動の、それから文化の諸體系が出て來るところの終始一貫的融合（das folgerichtige Ineinandergreifen）である。もう一つは歴史に於ける諸の大いなる意志統一の權力（die Macht der grossen Willenseinheiten）である、これら諸統一の下に從へる個個の意志に倚つて社會の内にある終始一貫的な行爲を打ち建てる權力である。この兩者が目的聯關を完成する、否この兩者は生ける目的聯關である。しかし前者の場合では、この目的聯關は、それぞれ獨立せるものであるが行爲するに當つてはその事柄の本性に倚つて互ひに適應し合つてゐる諸個體の行爲によつて實行され、後者の場合ではある意志統一がその統一を通して結び合はされてゐる諸個體の上に振ふその權力によつて實行される。自由なる行爲と活動の規整、自分だけの生存（Fürsichsein）と他人との協同（Gemeinschaft）がここでは對立してゐる。しかしこの二つの大いなる事實（タートベシユタント）は、活ける歴史に於

て悉くさうあるやうに、互ひに關係し合つてゐる。個人のそれぞれ獨立の終始一貫的活動は、それが目的の進捗のために團結を形作ることもあれば又社會の現存の體制の中に支撐點を探し求めこれを見出し若くはこの體制に自らの意志に背いても從ふことがある。がしかしいつでもかかる活動は、一般に個人のそれぞれ獨立せる終始一貫的なる行爲に對してそれの活動の場面を確めてやり且つ制限を置くところの、社會の外的體制の一般的制約を受けてゐる。

かやうにして文化の諸體系と社會の外的組織とが、歴史的-社會的世界の活ける目的聯關の内にあつて、相共に存在してゐる其諸關係は、ここにある事實の存在することを告げてゐる、個人のすべての終始一貫的行爲が受くべき制約を構成する事實、それが内には二つのものが卽ち文化の諸體系と社會の外的體制とが分かれないで共共に存在してゐるある事實である。曰く法律である。法律の中には、後に至つて文化の諸體系と社會の外的體制とになつてゆくところ

のものが、分たれざる統一をなしてゐる。だから法律の事實はここに起る分離の本性及び分離されたものの多樣なる諸關係の本性を明瞭にしてくれる。

法律の事實に於ては、人間の社會的共存生活の根もとに於て見られる如くに、文化の諸體系が社會の外的體制から分たれてゐない。あらゆる法律概念は社會の外的體制の契機を自分の內に含んでゐるといふことがこの事實（タートベシュタント）の徵表である。この點に留意すると、法律が事實存在（ヴイルクリッヒカイト）してゐることからそれのある普遍的概念を繹（ひ）き出さうと目論む人に當然起つて來る諸難點の一部が明らかになる。同時にまた法律の事實に於ける二つの側面の一方を力說しようとするあの實證的研究者達の一部のものの傾向と、これらの人人から閑却された側面を重要視しようとする他の一部のものの傾向とが如何に對峙してゐるかが明らかになる。

法律は終始働いてゐるある心理的事實としての法意識に基礎をもつてゐるあ

る目的聯關である。このことを否定しようとする人は、法律の上に實際起つた狀態すなはちある高い秩序の信仰、法意識及び成法とが一つの緊密な聯關を保つてゐたあの實狀と、矛盾を來たすことにならう。彼は成法を批評（ユーベルゲライフエン）するのみならずこれに反抗する法意識の活ける力の實狀と矛盾を免れないであらう。彼は法律の實在（例へば慣習法の歷史的地位（ヒストーリッシエ・シュテッルンク）に於て現はれたが如き）を彼の表象圈內に取入れようがためにこれを矯め傷ける。かくして精神諸科學の中で自分の作業（ライストウンク）の限界を自覺することの殆ど稀であつた體系的精神は、思想展開の簡明を求める抽象的誘惑のために豐かな實在を犧牲にする。

しかし法律の目的聯關の志すものは、それによつて諸個體の相互の關係及び物件の世界並びに諸全體意志（die Gesamtwillen）との關係についての諸個體の權力範圍が規定されるところの强固且つ普遍妥當的な調節（Abmessung）の仕方をもつてする諸の意志の外的結合である。法律の實在はこの機能に寄り凭

つてゐる。法意識すらも理論的事實（ein theoretischer Tatbestand）でなくて意志事實（ein Willensbestand）である。

既に社會の外的體制の事實と相關的關係に置かれた法律の目的聯關はもう外的に眺められてゐる、卽ち二つの事實はいつでもただ併列的、共在的に關係してゐる、處が兩者は原因結果として互ひに結ばれてゐるのではなくて各が他を定在の條件として持ち合つてゐるのである。この關繫は因果關係の內で最も困難なそして最も重要なる諸形式の一つである、これは精神諸科學の認識論的論理學的根據づけをまつてのみ明瞭にされる、さうしてここに吾吾の論證、卽ち精神の實質的（ポッテーフ）諸科學は、それの嚴密な學的形式の如何を決定する諸點に卽いては、ある根據づけの學に還つてこれに指示を仰ぐべきであることを示さうとする吾吾の論證の連鎖の中に更にある節（グリート）成部分が組入れられる。實證的研究者にして明晰ならんことには努めるがしかしそれを平坦に墮せずしてかち獲やうと

するならば、かかる根據づけの科學に還らざるを得ないことが解るであらう。さて法律卽ち法意識がそれの中にあつて働きを發揮し得る目的聯關としての法律は法律の目的聯關と社會の外的體制との間に相關的な關繫が存する限りは、全體意志（ゲザムトヴィツレン）卽ち全體性の統一的意志（die einheitlichen Willen der Gesamtheit）及び物件のある一定限度の部分に對する其の支配とを前提としてゐる。そこでかう云ふ理論的命題すなはち、法律の目的聯關は、それが假に全體意志のあらゆる種の缺如を伴ふても存在するものと考へられたとする場合、かかる全體意志の發生を歸着とせざるを得ないだらうといふことは、何らの有用なる內容を含んでゐない。この命題は、人間的本性の中には諸の力が働いてゐる而して法意識から出て來る目的聯關と結合する、かくして目的聯關はこの結合を、自分の活動のための前提條件を創造するために、利用するといふことを言ひ表はすに過ぎない。これらの諸の力が存在するが故に、精神的生活の發條として働きを

發揮してゐるが故に、それ故に人間的本性のあるところには社會の外的組織もまた存在し、而して法律制度の必要を待つ要がない、といふことになる。さてこの命題が眞であるとともに、あらゆる法律概念に於て見られる法律の事實に於ける上述の兩面性に應じて、法律の事實に於ける他の一面から出發したところの他の對立命題もここに眞とせられることにならう。若し社會の外的體制が、謂はば家族結團（Familienverband）或ひは國家として、單獨で機能を發揮しゆくものと想像されるなら、然るときは外的體制は法意識の中で働いてゐるところの人間本性の諸成素を攝取してゐることにならう、その結團は自分で法律制度を發展さすであらうし法律の强固且つ普遍妥當的なる調節でもつて、それに下屬せるもの相互の、及び諸物件に關しての尙また彼自身に關しての權力範域を制定するでもあらう。

それ故に法律に於ける目的聯關と社會の外的體制の二つの事實は相關關係を

なしてゐる。がしかしこの洞察もそれらの聯關のほんたうの性質を盡してはゐない。

法律は命令の形をとつて、卽ちその背後にはこれを遂行せんとする企圖を有する意志が存在してゐるさういふ命令の形をとつて現はれる。この意志は全體意志卽ちある全體性の統一的意志である。ところでこの意志は社會の外的體制の中にそれが居所を持つてゐる、だから組合、國家、敎會の中に。といふのは吾吾が最も舊い社會狀態に歸つて見、そしてその種族學的節成を審かにすればするほど、吾吾はかういふ實狀（ダートベシュタント）すなはち個體相互に關し及び個體が物件に關する場合の權力範圍は諸個體の社會をなせる機能（die Funktionen dieser Individuen in der Gesellschaft）と、だからこの社會の外的體制と聯關して調節されてゐることを見出す。諸個體及びそれらの所有物の社會をなせる機能に對しての私法の獨立化は、漸次成長せる個人主義が法律の發展を規定するに至つ

た後代に見られるある階梯を示すもので、それもただ相對的のものである。かくして全體意志はそれが支配する體制内に於ける個個の個體の機能を顧慮してこれが法律を調定するが故に、法律の成立はこの全體意志の中に居所をもつてゐる。從つてこの全體意志は自ら企てた命令を維持し、それが侵害を擁護する自發的性能を自明的に自分の内に含んでゐるところのものである。そして而もたとひ全體意志に命令の法式化や公布並びに執行のための特別なる正規機關が備つてゐやうとも若くは缺如してゐやうとも、この自發的性能は存續し徹底することに努める。例へばかかる機關は一方では慣習法にあつても、他方では國際法にあつても見當らない、國法に於ける統治權それ自身に關はる條文に關しても同樣かかる機關は見當らない。

それ故に法律の成立にあつては法律の所持者（トウレーゲル）である全體意志と個個の個體の法意識とが協働してゐる。これらの諸個體は法律を成立せしめる活ける諸の力

であり、永久にまたさうである。法律の形成は一方に於てこれら諸個體の法意識に基づいてゐ、他方に於ては社會の外的體制に於て構成された意志統一に依屬してゐる。だから法律は全體意志のある機能の諸性質のみを全然有してゐるのでもなければ、また文化のある體系の諸性質のみを全然有してゐるのでもない。法律は二部類の社會的事實の本質的性質を自らの内に合はせ持つてゐる。

もし法律の外に出るならば（Jenseit des Rechts）それに於て文化のある體系が構成されるところの諸個體の相關係し合へる行爲（das aufeinander bezogene Tun der einzelnen）と社會の外的體制の節成的諸部分たる全體意志の諸作業（die Leistungen von Gesamtwillen）とが次第に離れ離れになつて來る。

經濟學（die politische Ökonomie）が分析するところの體系はそれの調整（Anordnung）を國家の意志を通じて果したのでないことは言ふまでもないが、併しこの體系は歴史的-社會的全體の全節成によつて少からず影響されてゐ、そ

して尙また個個の政治的形體內に於ける國家の意志の側からの指導によつて著しく規定されてゐる。それである見地からすればこの體系はある普遍的理論、卽ち經理學（Wirtschaftslehre）の對象として現はれるが、他の見地からは、それの一つ一つは同國人（Volksgenossen）すべてに影響を與へるものの悉皆並びに國家の意志と法律制度によつて制約されてゐるさういふ個個（アインツエルゲシユタルテン）の形體、國民經濟學全體の總括（Inbegriff von Einzelgestalten, von Volkswirtschaftsganzen）として現はれる。かるが故に、そこに體系が基づいてゐる人間本性の成素、そのもとに體系が働いてゐる自然及び社會の一般的諸條件、この兩者に源をもつてゐる體系の一般的諸性質の研究は、國民的體制（die nationale Organisation）と國家意志の規整の作用（die regelnde Einwirkung des Staatswillens）とが仕遂げる影響の研究の補ひを得て全しといふべきである。

これを倫理（Sittlichkeit）に於て見ると、實踐的行動の領域に於てすでに、

精神的文化（die innere Kultur）は社會の外的體制から離れてゐる。この分離は、吾吾が社會の實踐的行動がその中へ分解されてゐる諸體系を除外するとき、いつでも見出される。言語と宗教は、人類（メンシユハイト）の節成、歷史の諸の流れ、外的自然の諸制約、これらの影響を受けつつ、それぞれ限界を持てる諸多の全體に發展して來たものである、それらの中で、其同種性によつて言語宗教の二體系にゆき亙つてゐる精神的作用の成素及び目的（der Bestandteil und Zweck des geistigen Wirkens）が、展開して指導調節（アンオルトヌンク）の諸形體の多くが生じたるかかる諸多の全體に發展したものである。藝術と科學は國家若くは民族若くは宗教の如何なる制限からも妨げられない世界事實（Welttatsachen）である、たとひいかに力强くこれらの社會的全體調和（コスモス）の分割（アツプグレンツング）がこれまでそれらに働きかけ尙又今日尙隨分强く働きかけてゐるにしても、藝術の體系は科學のそれと同じく、それらの根本的特質の發展のための探究の中へ社會の外的體制を導き入れるこ

とがなくてはならぬといふことはなくて、充分にそれらの根本的特質が發展せしめられ得るところのものである。美學の基礎も知識學の基礎も、その中に國民的特性の藝術及び科學への影響或は國家や諸種の組合（ゲノッセンシャフテン）のそれらへ及ぼす作用（ヴィルクング）を含んではゐない。

それらの認識について今ここに取扱はれたる文化の諸體系の社會の外的體制に對する關係の解明から、吾吾は今や文化の諸體系についての諸科學の一般的諸性質並びにこれらの科學の範圍の區劃に對する問題に移らう。

二　文化の諸體系の認識、倫理（ゼッテンレーレ）の學は文化のある體系のある科學である

ある特殊體系の認識は、この體系が歴史的-社會的實在の中で占むる地位によつて制約されてゐるところの諸の方法的運用のある聯關を得て、成し遂げら

れる。この認識のためにとられる手段は多樣である、その體系の解剖、その體系が含んでゐる諸性質の比較、尙また次のやうな諸關係卽ち一方ではこの研究領域と體系を構成する諸の相互影響の要素たるべき諸の生命統一の心理學的認識との關係、他方ではその體系がそこから研究のために分離されてゐるあの歴史的-社會的聯關との關係を有用に用ひること。しかし認識過程そのものはただ一つのものである。哲學的攻究と實質的攻究（philosophische und positive Untersuchung）を別ものとすることの堪へ得べからざることは次の事柄からだけでも出て來る、これらの認識が使用してゐる諸概念（例へば法律に於て言へば意志、責任能力など（der Wille, die Zurechnungsfähigkeit usw.）藝術に於て言へば想像力、美の理想など（die Einbildungskraft, das Ideal usw.））、並びにかかる認識がそれに到達する若くはそれから出發するさういふ根本的諸命題（例へば經濟學（ポリテッシエ・エコノミー）に於ける經濟性の原理（das Prinzip der Wirtschaftslichkeit）、

美學に於ける情性生活の影響による表象の變改の原理（das Prinzip der Metamorphose der Vorstellungen unter dem Einfluss des Gemütslebens）、知識學に於ける思惟法則（die Denkgesetze）、は心理學の共働を俟つてのみ充分に確定され得るといふこと。實證的研究者達がこれらの體系の解釋に關して分離した大いなる諸對立の如き實に眞に記述的なる心理學の協力を得てのみある解決を見出すことができる、何故かといふにそれらの對立はかかる研究者達の眼にちらちら見えてゐた人間的本性のあの類型像（das typische Bild）の相違に基づいて生じたのであるから。私はこの重要な點を著しい實例に當つて說明して見よう。言語、倫理（ゾッテン）、法律の合理的考案からの演繹は長い間これらの體系の實證的諸科學をも支配して來た、かかる心理學的理論は、藝術的天才の仕方で無意識に創造しゆく民族精神、それの主（ハウプト）なるいくつかの生命の現はれ方（レーベンスオイセルンゲン）の有機的生長の廣大なる直觀を取入れることによつて變つて來た。しかるにこの理論は、ある

無意識的創造的世界精神（ein unbewusst schaffender Weltgeist）の形而上學的法式によつて支へられるの餘り、先の偏見と同じ心理學的偏見をもつて、高揚せるある直觀力に基づく創造と悟性の硬い仕事と算出とが生み出した創造との區別を見誤つた。前者はそれの諸形像（ビルデル）の合法的發展の中に無意識に働いてゐる、このことはヨハンネス・ミュールによつてはじめて明らかにされた根本的諸過程に當つてもすでに吟味して見られ得るところのものである、すなはち藝術の體系に於ける諸形成（ゲシュタルトウンゲン）の理解はこの方向に於ける心理學的研究から制約されてゐる。[二] 概念（フォルメル）、法式（インステイトウチオーネン）、設定（ゼツテイング）によつて働いてゐる悟性は後者に屬するものである。それでイエーリンクは、舊いローマ法の諸概念や諸法式は理智的に學的訓練を與へられた意識的の法律的技術の成果である、それの過程はたしかに思惟の根源的流動的な形體（ゲシュタルト）をなして保たれないで「極めて狹い範圍内に卽ち法律諸概念の形體（ゲシュタルト）内に跼蹐して外形化され凝固された」さういふ法律的思惟の

硬い仕事の成果に外ならないといふ論證を企てた。それの材料、事實存在して（デイ・レアーレン）ゐる生命（レベンスフェルヘルトニッセ）の幾多の關繫に對立せしめられたる、分析を事とする悟性の方法としての法律の方法は、イエーリンクによつてはじめて、舊いローマ法の訴訟と法律事務の構造に徵し、次いでまたこの舊いローマ法律學の實質をなせる法律概念の構造に徵して指摘された。人人にして法律の體系にとつてのこの問題を一般に亘り且つ比較法的に把へるならば、ここに心理學の協力を缺くことを得ないであらう、果してイエーリンク自身は、ローマ法についての彼の知見（ガイスト）から法律に於ける目的に關する彼の著述に進みゆき、「目的が全法律體系の基礎である」といふ論證を試みたことによつて、「法律の領域に哲學を驅る」ことを、言ひ換へれば心理學的根據づけ（グルンドレーグンク）を索めることに、決心せざるを得なかつた。

これらの特種諸體系及び社會の生命の中に於けるそれらの聯關は、吾吾が今それの緒につける諸研究そのものの聯關に於てのみ、明らかにさることができ

る。がしかしそれらは觀察の前には直觀的な、力强い、客觀的な事實の如くになつて現はれる。人間的精神はこれらを科學的に考察して來たがその以前にこれらをかかる形體に作りあげてゐた。これらの體系の發展の途上には、そこではまだ理論的追考（ナッハデンケン）が實際的作用（ヴィルケン）と構成力（ビルデン）から區別されてゐないところのある階梯がある。だから、後に至つて法律や經濟的生活の純然たる理論的基礎づけが說明に從事したその同じ悟性が何よりもこれらの體系の形成（ゲシュタルトウンク）に與つてゐたのである。これらの力强い實在性（レアリテート）（少くとも學的想像力（アインビルドウンクスクラフト）にはかかるものとして映る）の中の幾つかは、たとへば宗教と法律の如き、大層範圍の廣い科學の諸體系に作りあげられた。

社會の諸の根本體系（Grundsystemen der Gesellschaft）の上述の解釋を精神の實證的科學の存立に適用してみるとき、私の見得る限りでは、ただ法律と倫理（ジットリッヒカイト）の領域の觀察が困難を提示するやうに見える。——この困難は法律に

關しては倫理に關する場合よりも全然趣きを異にしてゐる、そしてこの困難は法律に於ては解決の試みがなされた。法律の諸科學は、その發展せるものに從へば、社會の外的體制の諸科學からある不完全な遣り方に倚つてのみ分離さることが出來る。何となれば法律に於ては文化のある體系の特性が外的體制のある成素から分かたれてゐない、そして法律は二部類の社會的事實の本質的性質を自らの内に合はせ持つてゐる。——さて、倫理が、社會的生命の中である機能を持つてゐるかかる體系として解せられ、倫理學(ジッテンレーレ)が文化のかかる體系の科學と解せられると、茲に別種のある懸念が起つて來るやうに見える。倫理は深い思想をもつた二三の研究者からかやうなある客觀態(eine Objektivität)としてでなく人格的生命の規範命令(ein Imperativ)と解せられて來た。ハーバート・スペンサー傾向のある哲學者すらも彼の大著の計劃の中で倫理學(エティーク)即ち「正しき生活(シャフフェネ・レーベン)に就いての理論」(die Ethik, „die Theorie über das rechtschaffene Leben“)

をそれの結論として社會學から分離した。かういふ表象に對する審議に注意することは無くてはならぬことである。

實際のところ、ある倫理といふ體系が存在してゐる、勿論それには多樣なる段階があり、長い歷史的發展を經て生成し、處を異にして樣樣にそれぞれの特種性を帶び、種種多樣な法式で形取られて存在してゐる、宗教若くは法律と劣らず力强い眞の實在性を有つてゐる。掟(die Regel)としての、仕きたり(das Wiederkehrende)としての、行動に於ける常例的普遍的なものの形式(die Form des Stetigen und Allgemeinen in Handlungen)としての道義(Sitte)は、ただ中性的基礎卽ちなるべく僅少の抵抗のもとにそれが目的を達しようとする行爲の見出されたる目的性の收得、並びに道德の格言の豐かな集積、尙また慣習法の中でもそれによつて慣習法が共通的なる法律信念(Rechtsüberzeugungen)、實行を通じて個個の個體に對しての支配的權力として聲明し得る限りでの法律信

念の總體（インベグリッフ）を包括する一面、これらを含んでゐる中性的基礎に外ならない。ウルピアンもまた道義（Mores）を定義して暗默の裡に成れる衆口の一致、定着せる永い慣習（tacitus consensus populi, longa consuetudine inveteratus）としてゐる。これに反して倫理は、諸の節成、諸共同社會、諸結團の區別によつてただ修正を受けてゐるにとどまるところの一個の理念體系（ein einziges Ideal-system）を成してゐる。この理念體系の探究は心理學的自省（psychologische Selbstbesinnung）と種種なる民族に當つてこの體系が受けた修正の比較（die Vergleichung der Modifikationen）とが結合されてはじめて遂行される、この比較研究に就いてはすべての歷史記述家の中でヤコブ・ブルクハルトが最も深い洞見を示してゐる。

倫理のこの體系は人間の行爲から成立してはゐない、それどころか人間の行爲に卽いて研究され得るものではない、さうでなくて意識の諸事實のある一定

の集團と人間の諸行動の中でもこの集團によつて產出されるその成素とから成立してゐる。吾吾は何よりも先づ意識のこの事實をそれの完成のすがたに於て把へることに努めよう。さて、倫理的なるもの（ダスジットリッヘ）は二重の形式で存してゐる、而して倫理的なるものが現象せるその二樣の形體（ゲシュタルト）が偏れる二つの道德學派の出發點になつた。倫理的なものは行爲に對する傍觀者の判斷として、も一つは行爲の外界に於ける成果から（だから行爲の目的性から）獨立せる內實を動機に與へてゐる動機內のある成素として、存してゐる。倫理的なるものは二重の形體をとるが別のものでなく一つである。後者の場合では倫理的なるものは動向理由に於ける活ける力（in der Motivation lebendige Kraft）として現はれ、前者にあつては外から他の個體の行爲に對して公平なる是認若くは否認のかたちをとつて反應する力として現はれる。この重要なる命題は次の如くに表明され得る。私が行爲者としてある道德的責務の羈束をうけてゐるあらゆる場合、こ

の羈束は傍觀者としての私の判斷の根柢となつてゐるその同じ命題でもつて言表はされる。從來倫理學(エティーク)はいつでも二つの形體の一つを根柢に置いた、カントとフィヒテは倫理的なるものを動向理由(ゼエイアチオーン)に於ける生ける力と解し、優秀なる英國の道德學者やヘルバルトは外から他人の行爲に對して反應する力と解した、かくて彼らは周到且つ根本的なる洞察はこれを缺かざるを得なかつた。何故かといふに、勿論傍觀者の贊同及び不贊同は倫理的なるものを分裂させないで含んでゐる、(これはこの上ない長所である)、がしかし色褪せた形式でもつて含んでゐる、殊に動(ベヴェーグルント)源と精神の全內容との內部的結合、行爲者のかの羈束的威力(ゲヴァルト)との倫理的戰ひをなすに當つてそこに顯はれるかかる內部的結合に就いては、この見地に於ては、語られる何らの力をも有つてゐない。他の見地すなはち動向理由そのものに於ける倫理的なるものが研究の對象となされる場合には、分析は甚だ困難である。何故といふに、動機と行爲の間の聯關のみは吾吾

に明瞭に意識される、しかし動機は吾吾にとつて謎のやうな仕方で現はれて來る。それ故に人間の性格(カラクテル)は人間自身には一つの祕密である、この祕密は人間の行狀(Handlungsweise)によつてのみ彼にそれも部分的に可見的となるところのものである。性格、動機及び行爲の聯關の見透しは詩人の形成力に特有なるもので、實際生活の直觀に特有なるものではない、而して現實の人間の現象に於ける感性的なるもの(das Ästhetische in der Erscheinung des wirklichen Menschen)すらも、創造的心靈のある映像(ein Abglanz der hervorbringenden Seele)は他人の行爲の上によりもはるかに自分の行爲の上に明るく輝いてゐるといふ點に、存してゐるのである。

さて倫理的意識は、この二重の形體をとつて、働きかけと働き返しの無限に分岐せる作用(シュビール)をなしつつ、活ける全社會に行き亘つて作用(durchwirken)してゐる。これを發展せる倫理的意識に從つて見ると倫理的意識の中の動(ダス・ベヴェーゲンデ)力は

二形式の力（クラフト）に分解される。先づその一方の形式では直接に作用する、すなはちある道徳的意識の完成及びそれの自發力（アントウリーブ）に屬せる行爲の規整として作用する。生きること（das Leben）を人間にとつて生きる甲斐あらしめるすべては良心（Gewissen）の基礎に安らつてゐる、何故といふに自らの品位の感情（Gefühl seiner Würde）を有し而してこれに由つて、かかる感情なくて變化し得るものに自信に充ちて面し得る者であれば、彼には必ず此の柢礎が、彼自身に於てのみならず彼が愛する人人に於ても、生き得るためになくてはならぬものであるから。さて他の形式とは、それを通じて倫理的意識が社會態を俟つて（das sittliche Bewusstsein in der Gesellschaft）作用するところの心理的の力であつて、間接的のものである。社會態を俟つて完成する道德的意識は個個の人に對してある壓迫として作用しかける。まさしくこの點に、一つの體系としての倫理が社會の最も廣汎なる範圍に對して支配力を有しそして社會に於ける最も多

様を極めたる動源を自らの下に置かしめるものたることが、根柢をもつてゐるのである。最も下級の動機でも倫理的體系のこの威力（マハト）に、宛も奴隷のやうに、從服してゐる。輿論、他の人人の判斷、名譽、これらは、其處では法律の仕遂げる强要が何らの效を奏しない世界で、社會を集結せしめてゐる强い結びである。而してある人が、自分の罪を定めようとする人人の大多數もまた彼自身が行爲したと全然同樣に行爲してゐるのだとたとひ確信したにしても、彼らにして若しその場合ただ世評（das Urteil der Welt）から免れ得てゐるといふことにして若しあつたならば、彼のこの確信も、閉じ込められた猛獸が一人の勇敢なる人間の監視を受けてゐるが如くに、犯罪者が法律の百の眼の束縛のもとにあるが如くに、それが下に彼の魂が立つてゐるあの威壓を、取去ることは到底できない。彼が倫理的輿論のこの全量（トータルマッセ）を實際に回避しようとなら、彼がもつと外の人人と、卽ち彼を圍繞する輿論のもつと違つた雰圍氣の中にあると